

第六章 宗教・文化



光明園キリスト教会堂落成

(1939年 岡山市立中央図書館光田文庫蔵)

隔離された入所者たちの暮らしにとって、入所者自身の心身にわたる支えが必要であったことは想像に難くない。それは、日々の暮らしを充実させることに他ならないものであり、その中にはまず精神のよりどころとなる宗教が、また生きがいとしての文化活動やスポーツ活動があった。

宗教の支え まず、『光明園年報』（資料三九二）には、宗教について「斯る倫理的生活を営ましむる基調をなすものは、宗教を措きて他に求むるに道なし」と述べている。つまり、園では入所者たちにとっての宗教の存在と信仰の重要性を強く認識していて、その活動に対して極力援助を図るとしているのである。

入所者にとつての心のよりどころは、きわめて差し迫った問題であり、このことは収録した「患者記録票」（資料三八九）に、赤裸々な宗教への想いが数多く綴られていることにも見ることができる。綴られた俳句や短歌をはじめとする文言の中に、ハンセン病者となつての自身の想いや、関わる人々への想いもさることながら、何よりも宗教への想いが強く存在することが分かる。なかでも自分自身を悩み多き人と認め、病者として生き抜かねばならない一生を思う、YMCA人の「蠟人形」と題する文章にはそれがよく表れている。つまり

「神の抱擁の中にこれがとりもなほさず愛生園の一員たる努力であり、大きく国家に対する忠義である」と結ぶ言葉、すなわち信仰を持つことが園の一員となり、国家への忠義となるとすることに彼の想いが、さらには当時の社会情勢・通念が見て取れるのである。

入所者の信奉する宗教は多様なものであった。例にあげた光明園では、真宗・真言宗・日蓮宗・キリスト教・天理教・金光教・その他となっている（資料三九二）。園内には各宗派の施設がそれぞれ建設されていて、葬祭に当たってはみな自身のよりどころとする宗教において送られた。当初光明園では、各宗代表者をもつて宗教理事會を設けて、各宗間の連絡と諸行事の調整などを行っていた。一九七七年（昭和五二）には、宗教行事を施設側へ返還することになって、理事會の発展的解消を図り邑久光明園宗教連合會へと改組している（資料三九四）。また、施設、自治會及び七宗團の三者が、夜伽（通夜）、葬儀等の執行に関して協議し、現在はその合意に基づいて執行されている（資料三九三）。

園内では弘法大師降誕祭、慰靈祭などをはじめとする各宗派による各種行事がそれぞれに行われ、あわせて園をあげての園葬も執り行われた。たとえば、戦時下の一九四一年（昭

和一六)三月の第六十三回園葬をみると、司式をキリスト教、当番は日蓮宗、賛美歌・祈祷などはキリスト教、文章朗読は真宗、納骨式は日蓮宗といった役割・担当にて執行されている。一方でたとえば天理教の大祭には、奈良県の天理教教庁から講師を含む三名が派遣されて来園している。この一行の中に映画班がいて、「九段の母」「日本ニュース」などのフィルムを持参、上映している。これらの例祭などは、各宗派の祭礼として行われたのであるが、他方では慰問としての意味合いをもあわせ持っていたといえるのである。

納骨堂と神社 人生を瀬戸内の一小島で終えた人たちの遺骨の大半は、故郷へ帰ることはなく、慰霊のため建設された納骨堂へ葬られた。まれに家族に引き取られる事例もみられたものの、この遺骨問題にハンセン病に対する偏見と無理解とが最も如実に表れているといえる。つまり、「納骨堂落成までの思ひ出の記」(資料三九五)にも記されているように、せつかく受け取った遺骨であったにもかかわらず、家族などが途中で処分してしまうということもあつたようである。療養所開所時から遺骨の行方は大問題であつた。そこで納骨堂建設を考えたが、多額の費用を必要とすることからなかなか実現せず頓挫していたのである。

こうした折、東本願寺の智子裏方より多額の寄付金が寄せられることになり、愛生園ではこれを納骨堂の建設資金として使用することに決定した。そこで一九三二年(昭和七)になつて入所者の中から建設委員を選び、各宗及び入所者による奉仕作業によつて工事は進められた。納骨堂は、収録した「納骨堂図」(資料三九七)にもみられるように、恵の鐘の鐘楼と同じく近代日本社寺総合建築といわれる美しい様式の建築であり、建築学上からも注目されるものとなつた。一九四二年(昭和一七)落成の光明園の納骨堂も、ほぼ同様式で建設されている。両園ともに納骨堂周辺はたくさんの花木が植えられ、参拝と同時にゆつくりとくつろげるよう、公園としての意味合いを持たせる工夫がこらされている。現在の愛生の納骨堂は、二〇〇二年(平成一四)に、光明園は一九九三年(平成五)に再建されたものである。

一方では、敬神観念を涵養するために、両園ともに長島神社、光明神社を建設している。祭神は光明皇后であり(光明園には天照大神を合祀)、光明神社では現在でも例祭が行われているが、長島神社では行われていない。一九三五年(昭和一〇)に完成した翌三六年の長島神社例祭(資料四〇〇)では、安仁神社の宮司による祝詞奏上をはじめ、岡山からやつ

てきた舞踊の師匠連による芸が披露された。夜には行灯に灯を入れ、また行灯をつけた船が島を巡るというにぎやかさであった。なお、長島神社のある手影島の海辺に建てられた花崗岩の大鳥居は、笠岡沖の北木島島民からの献納である（資料四〇一）。また、本殿左右の石灯籠は、紀元二千六百年及び開園十周年を記念して、入所者有志からの寄付によって設置されたものである。同じ紀元二千六百年記念事業として建設が進められた光明神社は、一九四一年（昭和一六）一月に竣工したが、戦後進駐軍の命令によって撤去されてしまった。再建の話が持ち上がるとともに募金を開始して、一九五四年（昭和二九）に鎮座祭及び入魂式が行われた。

多様な文芸活動 入所者は強制的に社会から隔離され、偏見や差別にさらされ、園では過酷な作業、断種・人工妊娠中絶等の人権侵害に苦しめられてきた。その厳しい極限状況の下で病苦や障害を乗り越えて文芸活動やスポーツに打ち込み、特色ある文化を創造してきた。

小説、随筆、詩、短歌、俳句、川柳、評論等の活動は、『愛生』『楓』に膨大な作品として蓄積されている。また、出版社から刊行されたもの、自費出版のものを含めて多数単行本が出版されている。愛生園図書室、神谷書庫、愛生編集部、光明

園図書室（旧福井文庫）、楓編集部等を訪れると、入所者の文芸活動による出版物の多さに驚かされる。また、岡山県立図書館ではハンセン病コーナーも設けられている。

入所者による文芸作品自体が、ハンセン病問題を検証する一次資料である。なぜなら、強制隔離政策の実態と極限状態のもとでの入所者の心からの叫びが聞こえてくるからである。また、美しい瀬戸内海に囲まれた長島の自然、季節の移ろい、人々の息づかいが伝わってくる。厳しく過酷な人生を強いられながら、詩情豊かに文学や演劇、音楽などの活動を進めた入所者の生き方に感動を覚える数々の作品である。ただ、これ等の作品をこの資料集に収録する紙数は無い。また、全ての分野の活動を取り上げることができなかったし、戦前に重点をおかざるを得なかった。しかし、私たちは今、入所者の文芸活動に関わる多数の出版物を手にすることができるとくに、『ハンセン病文学全集』（二〇〇二年）が出版されており、この中には愛生園、光明園の入所者の作品が多数収録されている。病状や後遺症のこと、家族との関係、入所者作業、園内での人間関係等々、入所者の全体像が語られている。そして、時代の変化と共に入所者の意識の変化も読み取ることができる。文芸作品として読まれるだけでな

く、資料としての位置づけをして活用されることを望むものである。児童作品を収録した第十巻には、一九四一年（昭和一六）に刊行された愛生園の児童たちの隔離の際の衝撃的な様子、療養所内での生活、両親・友人や故郷への思い等が綴られた作品、長島愛生園教育部編『望ヶ丘の子供たち』が収録されており、第五章でみられるように同時代の日本の学校制度とは違う特別な状況の中で子ども達の全体像が読み取れる。幼少年期に隔離された人は多く、証言と共に人権教育教材としても活かして欲しい。なお、これらの出版物の多くが、偏見や差別から作者が本名で書けなくて筆名、仮名で発表していることも、この問題の本質を知る手がかりとなる。

愛生園、光明園に出向いて直接、短歌・詩・俳句などの文芸作品を生み出す手助け、指導に当たった人々も多い。入所者に寄り添いながらその文芸活動や演劇活動を指導支援した人たちの姿にも着目したい。入所者自身の優れた作品と併せて史料や証言に基づく実証的検討によって、いわゆる療養所の文化の全体像を明らかにしていくことが求められているといえよう。そうした中の一人、永瀬清子は詩の選者として愛生園に一九四九年（昭和二四）に訪問して以来、長い間、愛生園・光明園の詩作に取り組み入所者に真摯に向き合ってきた

た（資料四一〇）。一九五四年の光明園詩作会版詩集『光の杖』の「あとがき」で、永瀬は時代による詩の変化に着目しつつ、光明園の詩人達のナイーヴな魂に触れて感動したことを記している。『隔絶の里程』には、「忘れえぬ人々」として本田一杉、長崎次郎、三浦環、河本太仁治、北野資子、永丘智郎等について記載されている。

一九五六年（昭和三一）五月現在の全患協事務局による療養所の「文化団体活動状況調査」によると（資料四〇四）、愛生園、光明園ともに文芸・スポーツ・花卉園芸・演芸・宗教等の多数の団体があり、所属している人数、指導者、刊行物、展覧会、試合、集会の様子など、活発に活動していた全貌が分かる。

二〇〇八年現在、両園の入所者は高齢化が進み、平均年齢は八十歳であるが、今なお活発な文芸活動を展開されている。優れた作品が堰を切ったように出版されており、歴史の証言としての意義も大きい。また、愛生園、光明園ともに展示活動が活発に展開されており、入所者の発表の機会であると同時に園内外の交流の場として大きな役割を果たしている。

長島氣象観測所は、愛生園の入所者作業として一九三五年（昭和一〇）六月一日から継続して観測が行われ、観測記録

は『気象年報』として刊行され、貴重な学問的意義をもっている。

長島愛生園の文芸活動 園では、一九三一年（昭和六）七月、早くも職員と合同の文芸発表会「風雅会」が開かれ、十月には『愛生』誌創刊（資料四〇五）、十一月には紅葉狩り演芸大会、愛生座公演（資料四一三）、職員と合同短歌会、園長杯争奪野球試合が開催されている。こうした活動は、無らい県運動や十坪住宅運動の一環として園が奨励したということもあるが、入所者からの自主的な活動として展開された。入所者の「心の糧」となったのは読書であり、「社会から遠ざかって静かな大気を呼吸する吾等にとつて読書が何物にも勝る慰めであり、向上の好伴侶である」として旺盛な読書熱があったこと、これが、文芸活動の土台の一つであったことも見逃せない。図書の実践は切実な入所者の願いであった（資料四〇六）。

俳句会である「露之芽会」（資料四〇七）、「短歌会」、「詩謡会」、「創作会」等の活発な文芸活動の中から、明石海人に象徴される優れた文学が生まれた。なお、慰安会は、『愛生』の発行や娯楽・演芸の提供等の他に売店の経営、農畜産・製菓・陶芸・畳表製造等の作業の運営、寄付金と事業益金の管

理等を通して入所者の生活・文化を深く規制しつつ活動を支えていた。厳しい検閲の下で書かれた『青年愛生』には、開園後間もない入所者の読書熱、魂の叫びが読み取れる。

明石海人賞（資料四〇八）は、一九三九年（昭和一四）、明石海人の闘病生活から生まれた歌集『白描』が出版され絶賛をあびた中で、腸結核で死去した後に設けられ、詩、俳句、短歌などの活動に資した。

資料四〇九は、一九五一年一〇月発行の『新緑』に掲載されたもので、敗戦後の活動から本格的な文化運動への発展を知る資料である。

光明園『楓』の創刊と文芸活動 光明園の『楓』誌は、一九三四年（昭和九）に創刊される予定であったが、風水害で頓挫し、ようやく復旧の気運が到来した一九三六年（昭和一一）五月に外島保養院患者慰藉会から発行される（資料四一一）。外島保養院時代にすでに文芸団体の活動が活発であったことを受け、俳句、短歌、詩などが発表されている。風水害後の分離委託収容時の様相と、入所者に「言論に創作に随筆に歌俳句詩等々の創作に、一意専心精進する」ことを呼びかけている。

一九四七年（昭和二二）一月一日復刊した『楓』は、原稿

用紙にペン字で埋められた手作りの冊子で、物も金も欠乏する中で、の文芸活動に取り組む入所者の熱い想いの結晶である。光明園においても「書籍・読書が隔離された療園での生活を余儀なくされている吾々にとって、大きな意義を有している」ことが、資料四一二で述べられている。

愛生園、光明園ともに視覚障害をもつ入所者が多く、点字による読書が盛んである。とくに、指先の障害もある方の舌読、唇読による活動は、入所者の生き方を知るうえで大きな意義をもつ。紙に打った点字を舌や唇で覚える苦勞、喜びが、点字資料や証言に接した者に伝わり強く胸を打たれる。

演劇・音楽等の活動 長島という隔絶の療養所に閉じ込められ、作業を課せられて欲求の体现を極度に制限されていた入所者にとつては、演劇、演奏、映画鑑賞等は単なる娯樂に止まらず生きていく証であった。愛生座、光明劇団の公演の結果とした意味は大きい(資料四一四・四一八)。戦後は愛生園、光明園、大島青松園での演劇を通じた交流も始まる。しかし、こうした活動も園の厳しい管理下に置かれていたことが起案書等からも伺える(資料四一六・四一七)。ハーモニカバンド「青い鳥楽団」からは、障害を克服していく入所者の苦勞と歡喜がほとばしり、また、昭和四十年代の園内の様子も読み

取れる(資料四二二)。光明園では「楽団光明」が充実した活動を展開していたが、昭和二十八年には「ニュースターズ」と名称を改め、演奏活動で入所者を楽しませた。

スポーツ 療養所内では入所者のスポーツ活動も盛んであった。一九三三年(昭和八)の愛生青年団の沿革(資料四二三)は、開園当初の青年の活動状況がつぶさに読み取れる。そして、スポーツ施設は入所者の作業による手づくりで工事が遂行されたのである。愛生園のグラウンド工事の資料からその苦勞が読み取れる(資料四二五)。

療養所は、入所者の労働なくしては運営が成り立たなかった。患者が患者の看護・介護等を担わされ、洗濯、土木工事、開墾、農作業、火葬等々をも課せられていた。スポーツ活動は、まず、入所者のグラウンド造成から始められたのである。

第一節 宗教

1 宗教の支え

三八九 宗教へのおもい〔抄〕

（愛生園蔵「患者記録票」昭和9年）

一 牧者がお居出下さって説教のある時職員様方の見ないのが何ヨリ寂しく思います。

信仰の旅路にあればみ教を聞き入る人の増してほしきを

〔宋書〕
一日なほ浅きにもかゝはず千人に垂人となる、最近の愛生園の素破らしい発展振りに、吾が国に癩患者がかくも多くあることに愕然とすると同時に、憮然たらざるものなり。世に癩者の楽園を謳歌されてゐる愛生園に、精神文化の問題が等閑に附せられてる現状を悲しむとともに、癩文学思想の作興並に指導に干する問題に余りにも冷かなる雰囲気を感じる次第なり〕

私達人間にはいろくくと次から次へ欲望が湧いて参りますですから、真の幸福を味ひ日々感謝の生活を致さうと思へば、

先づ第一に精神状態を変更せなければならぬと言ふ事は、少し思ひよ深い人であれば誰しも存じてゐる事と思ひます、多くの人々は先づ境隅^{〔遇〕}が違へばとか、立場が変れば真の幸福が得られるもの、感謝の生活が出来るものとのみ思つて、一生の間を不平を言ひ失望を感じつゝ過します、特に私達の如き病者に採つては境隅^{〔遇〕}的には恵まれないものですから、靈的に目覚め物質的の不幸を補つてあまりあるものを得なければなりません

その点に就きまして園全体の一人々々が、宗教的に目覚めると同時に、園当局に於きましてももつとく宗教団体を援助して下されば幸福と思ひます

Y M C A 人

題 蠟人形 光明を見いだすませ

原稿（マズイトコロ並）
（乞未並―希望）

最近の愛生園といふよりも自分が感謝の氣持^{生活}を得るやうになつた氣持であります、慈悲といふべきものを自分は欲しない、只過去に於て昨日迄悩多き多情であつた、入園一年以来の中にも不足だらけであつたのが、今日の我は一切を転向して感謝の念に、そして限りなき愛生の人として生きる幸をやうやく憶えることの出来た（そして自分の小さき使命に何

かゞ与えられてあるを——)

過去く、自分は遠く遡ぼりたくはない、目の先昨日迄は如何なる生活であつたか悩多き悩の連続でありました、尙事小にも腹を立てたり悲願〔観力〕し一人淋しくなり、一步誤まれば如何なる結果の生来〔つ欠〕であつたか？独り計り知ることの出来ない精神的生活、運命と云ふものは情けない複雑な迷路である、始末に負へない無茶苦茶である、余りにも欺瞞心的偽りの如き嘲弄侮蔑!!あちらに犬が吠えやうかこちらに虫が鳴かうが、そんな事うるさいことはは馬耳東風、あまりにも見えすいた愚弄、愛生園そのものであると云ふのでない、又人そのものとも云ふのでない、只運命づけられた其の儘の成行、凡てが凡てが嫌でならなかつた、たまらなかつた、自分はこれをどうして行つたら良いであらうか？克を征服する丈の努力もなく、只ヒステリー患者の如く、只明暮れ憂愁の外はなく心に堪えず泣いて居た、ほんとうに悶え苦しんで居た

ほんとうに魂の抜けた蠟人形の如き自分である

熱せられ、ば液ける自分が正しくとも痛罵されても抗拒反駁する丈の意志なき人形、突かれ、は転ぶ人形でありました

自分は誤りたる心から甦つた、更正した、熱ある真理に動かされて励ませ〔さ〕せて流石に液けかゝつた蠟人形も、その冷氣

に惹きしまるを憶えた、あゝ感謝く、感謝して足ることの出来ない天使より

私が京都尊敬するの知人(自分の凡ての心を話し打ち明けることの出

来る方)よりの長文の手紙によつてであります。その忠告的

何ものかを教へ掴ませる手紙の大節はこう書いてありました

—前略—朝夕は余程凌きよくなりほんとうに詩を讚美した

り、色々な思索にふける一番よい時候になりました、懐し

の愛生園も一入秋色濃やかになつたことと思ひます、先般

の返事を早く差上げたいと思つて居りましたが、実は七月

十八日附きで—中略—度々の手紙によれば貴君は未だに相

当将来の事について悩んでおられるらしいが、僕から云は

すればそれは間違です

人間は愚智も艱ばれることも仕方がないけれども、或時機

には静かに考へて凡てのものに理解を待たなければならな

いのです、神に祈りそして凡てに感謝といふものを捧げな

ければならないのです、貴兄は愛生園生活が堪えられない

らしいが、それは大きな誤りです、こんなに云へば気を悪

くされるかも知れないが、よしんば愛生園を出た処で(自

分は或目的があつたのですが)世間には誰が君を待つて呉

れるものが一人でも有りますか、只人々の嫌憎する冷い眼

ばかりです、そこをよく考へなければ^{くは}嘘です、それよりか
 愛生園の慈父である光田園長先生を初め、林先生其他職員
 の方が一生を患者の為に治療に救済に捧げていらっしやる
 樂園が、神の救の手に抱擁されて一生を感謝の裡に給った
 方がどれ位意義深いか知れませんが、とにかく僻んだ淋しい
 心を起してはいけません、神に祈りなさい、そして感謝し
 なくてはなりません、人間は神^信仰がなくては駄目です、人
 間の生活から信仰を除いたら実に空虚な人です、そして生
 甲斐がない生活の光明は見出せないのです

一生懸命に神に祈って心の安住出来る道を開拓せなければ
 いけません、僕も再び御生口として患者の唯一人の味方と
 して一人でも多く患者の救済に努力したいと心に願って居
 ります

—下略—

年月日

——雅兄

私はこの手紙を読まして戴き静かに考へました
 そして二度、三度拝読、再読、だんくくと涙が浸み出て来る
 のをおぼへ、初めよりも三度、四度読み!!、考へれば考へる
 程、只感謝にうなされるより外はありません

ほんとうにそうだ、神に祈りそして我わさへ陰れたる魂の中
 にも愛生の人であつても、何かの使命があるを
 暗い考へから光明を見出して清く朗らかに愉快に生を全うし
 やう

誤まりたる考へから脱して、神の抱擁の中にこれがとりもな
 ほさず愛生園の一員たる努力であり、大きく国家に対する忠
 義である

思ひは流転さらりと捨て、——

私は寂しい時悲しい時、何時もこの手紙を思出し、バイブ
 ルを引出して心の慰めとして居ります、「完」

〓一九三四、十、五〓記

三九〇 大師降誕祭

〔中国民報〕昭和6年6月21日

愛生園 大師降誕祭

裳掛村沖の長島愛生園では、全国各地から二百五十余名の重
 軽レプラ患者を収容し、光田園長等は恵まれぬもののため、
 恵みの樂園化に温情ある善導に大童であるが、二十日午前十
 時から島の中央に聳える礼拝堂において、弘法大師降誕祭を
 執行、光田園長、四谷事務官等から弘法大師の教への道をと

き聞かせ、精神的の修養に資し、引続いて患者達は民謡又は童謡の独唱、浪花節の公開等をなし、弘法大師の徳をしたふ一日を過した

三九一 慰霊祭

〔中国民報〕昭和11年5月14日

春季◇慰霊祭

愛生園で厳かに執行す

長島愛生園では十一日午前九時より、京都東本願寺光明会武内了温師外三名の来園を得て、礼拝堂で了温氏導師となり、同園職員並に入園者参列の上、薄倖な運命をたどつて物故した人達の春季慰霊祭を執行

此の日大谷智子裏方より電信を以て霊を慰むるの辞を受け、之を披露し一同納骨堂に参拝、生けるものにももの言ふ如く御霊の前に額づき、涙を新らしうして正午終了した

三九二 信仰する宗派

〔光明園蔵『昭和二十年邑久光明園年報』昭和21年刊〕

五、宗教

癩は治癒困難なる疾患なるが故に患者は社会より輦蹙嫌忌せ

られ剩へ肉身知己にすら疎せられ、呪咀的寂寞感より動もすれば頹廢的な感情を抱き、延いては懷疑的に陥り易き傾向あり。比等を絶望より救ひ、精神的に光明を与へ、以て行住坐臥を安心、希望、感謝の所謂法悦境に導き、其の日常生活を真に意義あらしむるは療養所に於ける重要な一使命なり。而して患者をして斯る倫理的生活を営ましむる基調をなすものは、宗教を措きて他に求むるに道なしといふも過言にあらず。本園は如上の信念の下に患者の宗教的信仰に対しては極力之を助長援護し、以て其の向上を図り居れり。

本園患者の宗団は別表に示すが如く真宗信者最も多し。而して現在真宗、真言宗、日蓮宗、天理教、金光教及基督教を公認団体とし、患者の各々は其の信奉する宗派に属す。尚各宗代表者を以て宗教理事會を設け、各宗間の聯絡と諸行事の円満なる進行を図り居れり。

因に本年中の布教、講話、回数等を各宗別に記せば左表の如し。

| | |
|-----|-----------------|
| 仏教 | 一一回(真宗九回 真言宗二回) |
| 基督教 | 二回 |
| 金光教 | 一 |
| 天理教 | 一 |

計

一三回

現在患者宗教別表 (昭和二十年未現在)

| 宗教別 | 性別 | | 計 | 宗教別 | 性別 | | 計 |
|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 男 | 女 | | | 男 | 女 | |
| 真宗 | 三〇七 | 九二 | 三九九 | 天理教 | 二八 | 一一 | 三九 |
| 真言宗 | 一五六 | 八七 | 二四三 | 金光教 | 一二 | 四 | 一六 |
| 日蓮宗 | 二〇 | 七 | 二七 | 其他 | 六三 | 二四 | 八七 |
| 基督教 | 四〇 | 二〇 | 六〇 | 合計 | 六二六 | 二四五 | 八七一 |

三九三 夜伽・葬儀の執行

(光明自治会蔵「中央委員会・寮長会議事項綴」)

昭和52年 原本横書

資料No. 1

〈夜伽、葬儀等執行に関する合意事項について〉

S、五二、七、一

施設、自治会、七宗団

〈夜伽、葬儀の執行に関する事項〉

- 一、葬儀は施設の責任において園葬として執行する。
- 二、夜伽、葬儀の準備、後片付については施設が責任を持ち各宗団は適宜手伝う。

僧侶、神官、牧師等の招聘と送迎。

祭壇の準備後片付。

霊柩車、火葬、骨上げ等全般にわたり配車、運転、連絡等一切の業務。

三、夜伽、葬儀は霊安室において執行する。そのための設備を整える。

僧侶、神官等の更衣室及び遺族控室の増設
備品倉庫の整備。電話架設
五二年度 整備

四、祭壇飾り付けについて

イ、祭壇は三段備え付けとする。

ロ、供物は施設、自治会、三宝各二盛とする。

ハ、花環(小) 神式、仏式、各一對。

花籠 神式、仏式、各一對。

ニ、サカキ、シキビ(造花)、各一對。

五、夜伽、葬儀の時間について

〈夜伽〉

イ、午後七時以後の死亡の場合、当夜は夜伽をおこなわない。

ロ、夜伽終了時間は夏(五月〜九月)午後一〇時、冬(一〇月〜四月)午後九時を越えない。

〈葬儀〉

遺族、解剖等の都合により、やむを得ない場合を除き葬儀の執行は午後を原則とする。

六、納骨について

- イ、納骨は各宗団において適宜おこなう。
- ロ、春秋の合同慰霊祭は従来とおりとする。

〈夜伽、葬儀における諸事情簡素化について〉

S、五二、七、一

自治会、七宗団

- 一、夜伽における煙草配り廃止する。
- 二、夜伽、葬儀の際の供物は施設、自治会のみとし、個人団体等の供物（香典も含めて）廃止する。

三九四 光明園宗教連合会

（光明自治会蔵「参考資料」昭和52年）

昭和五十二年九月 日

宗教理事会

代表 E・S

自治会副会長

山田一夫殿

宗教理事会改組申請

今般宗教行事施設返還に伴い園内公認宗教団体（宗教理事会構成）真宗法話会、真言宗大師講、日蓮宗立正会、天理教一条会、金光教求信会、基督教光明園家族教会と日蓮正宗創価学会の七宗団により、宗教理事会の発展的解消と新たに七宗団による統一の在り方について協議の結果、左記の通り決意いたしました、よろしく御高配の程お願い申し上げます。

記

一名称 邑久光明園宗教連合会とする

二構成 公認七宗団（真宗、真言宗、日蓮宗、天理教、日蓮

正宗、金光教、基督教）を以って構成する

三目的 七宗団の融和を計り各宗団運営に関する諸事項のと

りまとめを行う

四運営 (イ)一宗団より一名選出、七名をもってこれに当る

(ロ)連合会正副会長は七名の互選とする

(ハ)各宗選出員七名の任期は二月一日より翌年一月

三十一日迄とする

（但し本年は十月一日より一月三十一日迄とする）

細則

- 一、宗団助成会の取り扱い
- 二、物品助成の取り扱い
- 三、供物の取り扱い
- （1 正月供養 2 盆供養 3 春秋彼岸会法要）
- 四、その他宗教に関する事項

付則

地蔵盆、石山寺観音院、花祭供養は連合会主催行事より除く

但し、地蔵盆、石山寺観音院供養は、真言宗の大祭として従来通り行う

花祭りは真宗、真言宗、日蓮宗が独自に供養する

2 納骨堂と神社

三九五 愛生園納骨堂落成の経緯

（愛生編集部蔵『愛生』第七号、感謝記念号 昭和9年）

納骨堂落成までの思ひ出の記

入園者 栗下信策

遺骨とる人もなき子とみ恵みのみ心こめて賜ひぬみ堂を

これは納骨堂落成式に勿体なくも御台臨給ひし、東本願寺御裏方様にささげし我等病友の歌である、私はこの歌に御堂の出来る心又永遠に御堂として輝き給ふすべてのものが云ひつくされてあると信ずるものである。しかし此の歌につき、思ひで多きまゝ記憶をたどつて少し語つて見たいと思ふ。年月は忘れたが、何でも七八年前と思ふ、所は全生病院、時は冬、道が霜解けの日であつた、只今の光田園長殿が同院に御在職中であつた、私が礼拝堂へ集會に参らんと通りかゝりし時、光田院長殿は四号病室（ホ号）の前にて病友の福島氏と外一人の盲目の老婆と何か御話しになつて居た、私を御呼び下さるから何御用かと参つて見ると、光田院長殿が申されるには『此の稻本夫婦が死んだら遺骨を家へ送らんでくれ、折角忘れかけた処へ……何も知らぬ縁組した家族が知るために一家は破滅して終ふ^{しも}。大騒動になるからどうか死んだら病院に置いて貰いたいと云ふのであるが、お前達はもつと生きた宗教に活動をして各宗団体で各自が本山へでも納骨^{おさ}める方法でも講じたらどうか』との御言葉であつた、丁度山田書記殿も御通りかゝりて呼ばれて同じ事を仰せつけになつた、で、私共は直に各宗惣代と交渉し各団体はその布教師を通じて此の遺骨の処置につき議したことがある。

この遺骨問題では病者も当局者も随分と悩まされたものである。これは見たことではないが、折角病院に来て遺骨を貰ふて帰る家族の方々の内にはその処置に困り果て、とある畑の中にソツと遺骨を埋めて置いたといふ様ないたましい話もあつた。我等は深く此の遺骨の事につきて長くなやんで居つたのである、この愛生園に来て第一に我等は納骨堂建設の事を念じた、然しこれには多額の費用が入ること容易の事ではなかつた。

然るにたま／＼東本願寺社会課では全国癩療養所慰問巡回を初めた、本園にも親しく慰問せられ開拓の実状を見て驚嘆せられた、此の状を高浜課長殿より光明会総裁智子御裏方に申上げた処いたく御同情下されて御手許金壹千五百円を愛生園へ賜ふたとのことである、その当時十坪住宅の運動の初めであつたから、園長殿は此の十坪住宅に御用ひなさると思ひきや、此のお金を以て納骨堂建設費にあてらるゝことになされたのである。『園長殿は曰く、智子御裏方様は勿体なくも皇族の御出ましであらせ給ふ、我が日本の国民はすべてが宗教宗派を超へて一様に皇恩の御懐に納め給ふ御仁慈である、で、此のお金を以て多年念願であつた、納骨堂建設費にあてたいと思ふが皆は何う思ふか』と舎長会に御問ひなされた、

勿論誰れ一人異議を申す者のあり様なく、それは有がたいことであると皆は喜んだ。直に建設委員をあげて工事にかゝることになつた、患者の方では、米沢氏が場所の撰定、工事総指揮が杉山氏、現場事務が栗下と分担して、昭和七年春起工した、初めは各宗団体中より奉仕労力で細道や堂の敷地をつくり初めた、工事は進み大なるにつれ特別奉仕的報酬の許に爾後二年の歳月と、土工延人二、五二四、五人、鉄工一一七人、塗工一、三一〇人外に一般奉仕三、〇四八人計六、九九九、五人を以て昭和九年五月十日完成したのである。

特に土工方面分担した方々は特別奉仕労作報酬に甘じて二ケ年に渡る間、懸命の労力をささげて頂きし事と塗工部主任の仕上に際し献身的努力は特に記して感謝せずには居られぬのである。

終りにのぞんで、園長殿の御心を体し納骨堂は淋しき所ではなく一つの公園として朗かに明かるい遊園場となしたい、それにはまだ／＼残業整理や花草、樹木、の植込みから松の手入、施肥等々これからである、納骨堂から光ヶ岳へ道路を開き、桜、楓、藤、椿、梅、はぎ、その他いろ／＼の草樹を植ゑて一大公園とし、やがては恵みの鐘に時をつけ、日の本の癩浄化の鐘音を響流十方と高鳴る日を迎へたいものである。

三九六 納骨堂完成

〔大阪朝日新聞〕昭和11年6月1日

総合宗教建築に新様式を拓く

愛生園が信仰的典型美を誇る

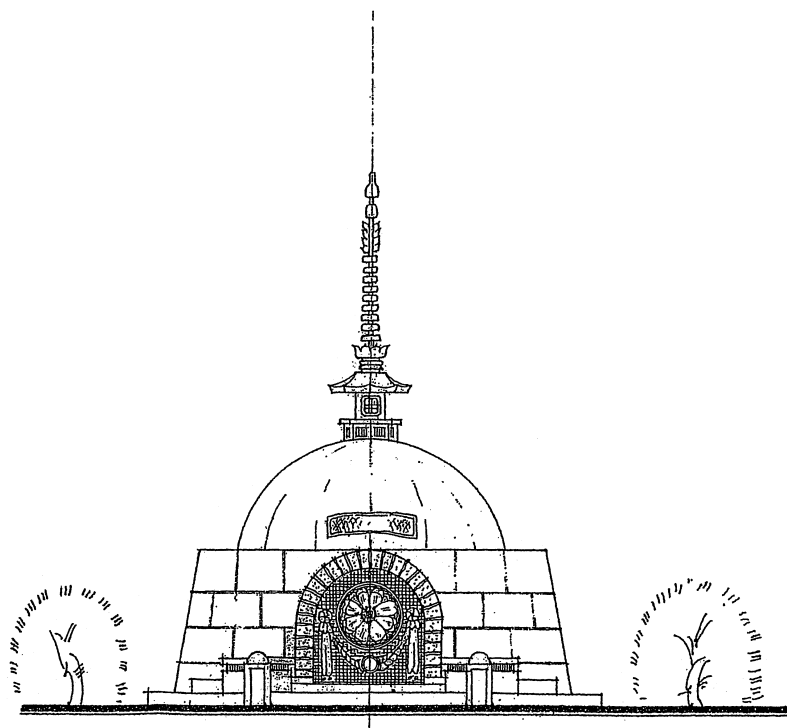
鐘楼と納骨堂完成

救癩を使命としてたつ長島愛生園が、生命線外である社寺建築に新たな分野を開拓し、行詰った近代建築界に指針を示した快信―千三百余名の癩患収容する村者を、岡山県邑久郡裳掛国立長島愛生園では精神的治療即ち信仰によって恐るべき病魔を駆逐すべく、宗教の自由を尊重して創立の当初から真宗、真言宗、日蓮宗、クリスト教の四大宗教をとりいれ、葬祭行事に至るまで患者の意思通りに行つてゐるが、従つて園内の宗教的建造物にもこの点に細心の注意がはらはれ、一宗一派に傾かない愛生的な精神をふくめた総合建築に目標をおき、同園営繕課で鋭意研究の結果『近代ニッポン社寺綜合式』を案出し、昭和九年以来納骨堂および恵の鐘楼を建築してきたがこのほど完成、その独自の様式をとりいれた二つの代表作は、社寺建築の動向に断然異彩をはなち各方面から絶讃され、視察のため専門家が続々来園してゐる、意外な反響に驚く営繕課を訪れると、行光技手は語る

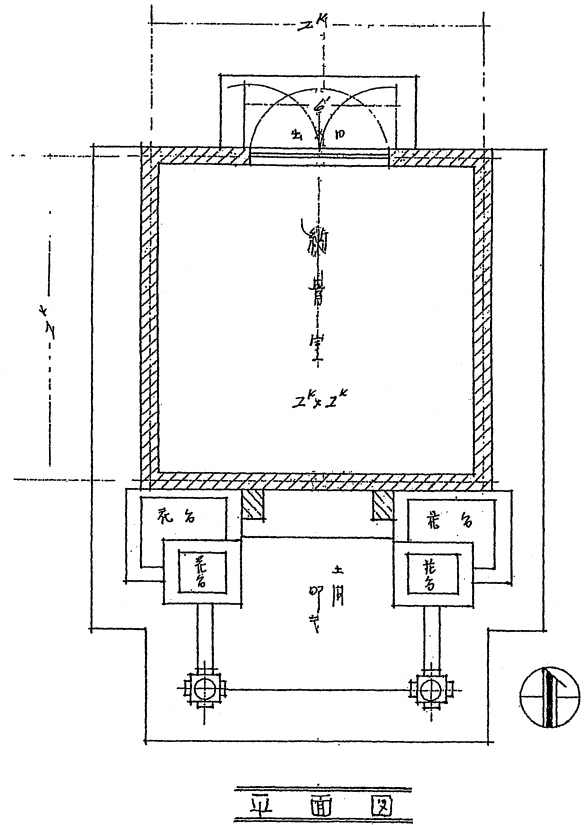
三九七 納骨堂図

〔三宅克広氏蔵〕「納骨堂新築工事図」昭和9年

「各宗味をとりいれるため鐘楼は城郭式に泰西の新味を併せ、納骨堂の尖塔は京都から灯籠は朝鮮の仏国寺からといった工合に、療養所患者の気分を生かすことに苦心しましただけで、お褒めをうけるほどではありません」(岡山)



正面姿図



三九八 光明園納骨堂落成式

(愛生園蔵「教育関係書類」昭和17年)

邑久光明園納骨堂落成式順序

- 一、日時 十月十九日午前九時開始
- 一、總裁御日程

十月十九日午前七時 岡山市光清寺御出発

同八時半 邑久光明園御着、本館ニテ御休

憩(職員ヨリ御挨拶)

同八時五十分 本館御出発

三九九 長島神社奉祠

長島神社奉祠

- 同九時 納骨堂前御着即時開式
- 同九時三十分 右終了、記念撮影
- 同九時四十分 礼拝堂御着即時開会

式次第

- 一、敬礼
- 一、国民儀礼
- 一、園長式辞
- 一、御裏方御挨拶
- 一、随行长復演
- 一、患者総代謝辞

同十時三十分 終了、礼拝堂御出発園内御巡視

同十一時 本館御帰着

同十一時二十分 御昼食

正午 邑久光明園御乗船

長島愛生園へ御出向

(以上)

(「山陽新報」昭和9年12月13日)

愛生園の諸式

裳掛村長島愛生園では、患者の敬神観念を涵養するため、長島神社を奉祠すべく計画中であつたが、十三日地鎮祭並に大麻奉安式を挙行し、併せて患者の忘年会を開き、なほ二十日は開園記念式、二十一日は死亡患者の園葬と故杉本医官の追悼式を挙行する

四〇〇 長島神社例祭

〔山陽新報〕昭和11年6月7日

長島神社 けふ例祭

灯の海を現出した宵祭

七日は曩に建立成つた長島神社の祭神光明皇后の御薨去遊ばされた日に該当するので、この日をトし愛生園では国幣中社安仁神社より宮司神官を招き、午前六時から一時間に亘り厳かに例祭を執行、御慈悲を偲び奉ることゝなつた、午後は岡山から清水千恵蔵氏を始め鳴物や舞踊の師匠連に新中検の芸妓等を加へた一行が訪問、演芸会を催して島の患者の慰問をなすことゝなつた

尚六日晚は宵祭として、職員の家族や子供、患者の子供達に清書や絵を描かせて行灯を作り電飾を施し、満潮時にな

ると行灯を船につけ愛生学園の音楽団員を乗せ、島の周遊をなし患者達を無性に喜ばせた

四〇一 大鳥居献納

〔合同新聞〕昭和12年9月19日

長島神社へ 大鳥居献納

癩病撲滅祈願の北木島から

亡国病である癩の撲滅も又非常時国家の急務であると、小豆島・北木島島民は海の公園瀬戸内海から、癩病の徹底的駆除の烽火を上げ、村長以下方面委員等に依つて各島々に檄を飛ばしてゐるが、更に国立癩療養所邑久郡裳掛村島^{〔長久〕}愛生園内手影島の長島神社に、右計画の実現を祈願し同島産の花崗石を以て、高さ数丈の大鳥居を献納することゝなり、目下工事を急いでゐるが、近く之が献納式を挙げる筈である

四〇二 石灯笼寄進

〔愛生園蔵「患者関係重要書」昭和15年〕

自発第六号 願書

別紙願書ノ通り長島神社石灯笼一對寄進ノ件、御詮議ノ上御認可被下度及御願候也

昭和十五年四月十日

教育部長 加納宗明^印

常務委員長 田中文雄^印

愛生園長

光田健輔殿

^{〔朱書〕}
「本件願書ノ点許可相成可然哉、尚物資不足ノ今日ニ付、実地檢分ノ間三原指導員ヲ出張セシメラレ度伺上候」

願書

一石灯籠

私共有難皇国大日本帝国ニ生ヲ享ケ、千載一遇ノ光輝アル紀元二千六百年ニ際会シ得マシタ事ハ、一生一代ノ幸福光荣ト感激シ、国民ノ一員トシテ曠古ノ慶祝ヲ永遠ニ記念シ奉ル為メ、且ツハ開園満十週年ヲ迎へ、日頃ノ鴻大無辺ノ御仁慈御恩寵放射ノ為メ長島神社本殿左右ニ石灯籠一對寄進建立仕リ度、尚ホ来ル神社祭典迄ニ完成ノ念願ニ御座候、依テ特別ノ御詮議ヲ以テ右御許可為シ下サレ度、此段及御願候也

昭和十五年四月六日

右奉納者

杉山宮次^印

安立茂三郎^印

小泉久四郎^印

蓮池唯市^印

長島愛生園

園長光田健輔閣下

自発第十七号 願書

別紙願書ノ通り納骨堂前石灯籠一對寄進ノ件、御詮議ノ上御認可被下度及御願候也

昭和十五年四月二十四日

教育部長 加納宗明^印

常務委員長 田中文雄^印

長島愛生園長

光田健輔殿

^{〔朱書〕}
「本件認可相成可然哉」

願書

一石灯籠 一對 上納

紀元二千六百年ヲ永久ニ且ツ開園満十週年ノ両記念ト共ニ、
幽明境ヲ異ニセラレン諸先生ノ御遺徳ヲ感恩報謝、合セテ今

ハ亡キ病友先輩ノ足跡ヲ偲ビ、其冥福ヲ祈念ノ為メ、以上ノ趣旨ニ於テ今般入園者有志ニ依リ、万靈山納骨堂地域内ニ石灯籠一対御寄附建設仕リ度候間、私共ノ微意ヲ御汲取ノ上、特別ノ御詮議ヲ以テ御許可為シ下サレ度、別紙寄附者人名表相添ヘ此段御願ヒ申上候也

昭和十五年四月廿四日

右建設発起人

杉山宮次[㊟]

栗下信策[㊟]

蓮池唯一[㊟]

長島愛生園

園長光田健輔閣下

四〇三 光明神社竣工

〔合同新聞〕昭和16年1月23日

光明神社竣工

鎮魂祭を執行

裳掛村虫明長島の光明園では、紀元二千六百年記念事業として造営中の、光明神社の工事が竣工したので、三十一日午前十時より鎮魂祭を執行する

紀元二千六百年記念

納骨堂前石灯籠建設寄附者氏名

杉山宮次

栗下信策

石井安衛門

田中宇作

山岸寅造

田代久夫

片山末吉

田渕作次

三好百合造

奥津金十郎

栗下こきん 掛石初五郎

野上弥太郎 酒井清一

久保一太 高橋定吉

岡崎力ヨ 蓮池唯一

以上

第二節 文化・スポーツ

1 多様な文化活動

四〇四 文化団体活動状況調査

(光明自治会蔵「全患協通信綴」昭和31年)

〔表紙〕

一九五六年五月現在
文化団体活動状況調査
全患協事務局

〔邑久支部、長島支部以外は省略〕

文芸団体

邑久支部

創作 会員は十一名、選者は木島始氏、月刊誌に「文学界」

「文芸首都」各一冊を購入し、春秋二回園内募集を行

い年に一回全国募集を行う

詩 会員二十三名、選者に永瀬清子、坂本秋子〔ママ〕の両氏、

月刊誌は詩学一部を購入し、年二回(春秋)園内募集
を行い年に一回全国募集をする

短歌 会員二十六名、選者は亀山美明、服部忠志の両氏、

「短歌」「短歌研究」各一冊を購入、春秋二回園内募集
を行い年に一回全国募集を行う

俳句 会員四十五名、選者は浜中柑児氏、月刊誌はホトト

ギス二部、俳句研究一部を購入し春秋二回園内募集を
行い年に一回全国募集を行う

随筆 会員十名、春秋二回の園内募集と年一回の全国募集
を行う

絵画 会員は十五名、「美術手帖」一冊を購入、春秋二回
展覧会を開催する

長島支部

創作 会員十二名、選者に小谷剛氏、月刊誌は「文学界」「群
像」各一冊を購入、作品は愛生誌に掲載

詩 会員十一名、選者は永瀬清子、藤本浩一の両氏で永

瀬氏には毎月担当して頂く、月刊誌には「詩学」一冊
を購入、作品は愛生誌に掲載し年に一回「海標」を発
行する。希望は詩集(単行本)を発行したい

短歌 会員二十八名、選者は大村呉楼氏、「短歌」「短歌研
究」を購入、作品は愛生誌、年刊歌集に掲載、サーク
ル活動としては、月例会一回、研究会一回、盲人歌会

一回、各結社歌会一回を行う。尚本年も年刊歌集の刊行を予定している

俳句 会員三十四名、選者は梶井枯骨氏、毎月「ホトトギス」「俳句」「俳句研究」「馬酔木」等各一冊を購入し、作品は愛生誌に掲載する。又月二回の句会や盲人に對する読書会及び随時吟行会も行つてゐる

書道 会員十名、研究作品は墨潮会同人に通信を以つて添削を行い作品は墨潮誌（前、山陽書壇）に出品する。月一回の月例研究会を以ち年一回、乃至二回の作品展覧会を開く。尚各園に於ける全書道の合流展覽会開催を計画

絵画 会員十二名、指導者及び選者には村川源之助氏、吉田先生、中田先生の各氏、参考書には「美術手帖」を購入、随時研究会を開き作品の選評を先生來園の都度行つて頂く。春秋二回展覽会を催し、絵画を通して各団体に協力、又病室へ寄贈し、参考館を完備して協力する

スポーツ団体

邑久支部

野球 人員は三十六名、月刊誌野球界を毎月一冊購入、ペ

ナント戦としては春秋二回園内リーグ戦と春秋二回の愛生對抗戦を行う。その他園内舎別戦大洋（二十五才以上）と若鷲（青年）の對抗戦を行う

庭球 人員は三十二名、特に練習方法等はないが、春秋職員との合同大会及び愛生と春秋對抗戦を行う

卓球 会員は四十八名、練習はA級、B級、C級の三別にて行い春秋職員、患者の卓球大会及び愛生と春と秋に卓球大会を行う

長島支部

野球 人員は十五名、外来試合以外は特にコーチは行わな
い。三月に基本練習を行い、以後総合練習を行う。ペ
ナント戦は春秋二回光明園と三試合對抗戦を行い、又
春秋二回八チームに依る園内リーグ戦を行う。その他
職員と春秋定期戦をする

庭球 会員四十名で、内A級が十八名、B級が二十二名、
随時職員と練習を行い春秋二回園内大会を行い、A級
はリーグ戦、B級はトーナメントに依り勝者を決定

卓球 会員七十五名、内A級十三名、B級三十名、C級三
十二名で、練習は各クラス對抗を行う、及び職員との

練習試合も行う。ペナント戦は春秋各一回園内卓球大会を開く。又A級に依る分館長杯争奪戦を春秋二回行う

花卉 園芸

邑久支部

菊 人員五十八名、選者は山本憲太郎氏、年一回の菊花

展に出品。

朝顔 人員は不定、各自栽培し、朝顔展に出品する。

長島支部

菊 人員三十二名、指導者の必用時場合は岡山市より来

園する。参考書は必用に依じて単行本等を購入してい

る。種類は小菊、盆育菊、他菊一切を育苗する。肥料

は魚粉、油粕等を使用し、毎年十一月の菊花展に出品。

盆栽 人員は三十二名、参考書は「盆栽の仕立て方」を購

入、多種を栽培し、肥料は油粕若干、小鳥の糞等を使

用し毎年六月七日の盆栽展に出品。

親睦 修養 演芸 趣味 団体

邑久支部

婦人会 会員は七十六名、月刊誌は、婦人倶楽部三冊、婦

人公論一冊を購入、洋裁、和裁、活花等の講義を行う。行事は春秋二回の活花展の他春秋カルタ会を催す。

盲人会 会員一三名、特に指導者はないが、点字部を始

め、楽団（クロバー）、将棋等による研究会を行い、

更に慰安部を設けて活動している。発行誌は、点字機

関誌「白杖」（季刊）がある。総会は年に六回開く。

楽団 団員は十八名で、春秋二回公演会を催す。

演劇 人員は四十五名で、春秋に公演を行う。

囲碁 会員八十五名、講師は瀬川六段で年に一回来園指導

を仰ぐ。月刊誌は、囲碁新潮を購入、春秋二回大会を

開く他年に六回クラブ戦を行う。

将棋 人員六十名、月刊誌は、将棋世界を購入、春と秋に

大会を開く。又年に六回クラブ戦を行う。

長島支部

婦人会 会員四十八名、洋裁、和裁の講師を要請する。月

刊誌は、婦人公論、主婦と生活を購入している。花見、

盆踊りを始めその他の行事及び外来者の接待をする。

不自由者の会 会員四三〇名、研究会は月例懇談会を開き、

行事は春秋娯楽大会を催す。

盲人会 人員は一六四名、指導者は演芸を岡本はつ枝、川

上安成の両氏、点字は有馬先生に依頼している。購入刷紙は、点字毎日、リーダーズダイジエスト、黎明がある。サークル活動は各部を設けてそれぞれ活動し、点字部、読書会、民謡倶楽部、楽団青い鳥、放送劇部がある。発行誌は、点字愛生がある。行事は月例懇談会を始め慰安娯楽会、春秋演芸発表会、友園と交歓親睦会が行われる。その他全盲連の支部になっている。

楽団 団員十五名、必要に応じて研究会をもち、春秋二回園内演芸会を開く。

演劇 呼称愛生座、人員六十名、指導者は岡山より河本太仁治氏が来園され他に座員幹部に依る研究指導が行われている。参考書は、幕間、黙阿弥、明治、大正、文学、戯曲全集等がある。随時ラジオ、テレビ等に依り研究を行い、又研究集会も開く。春秋二回公演を行う。公演当日は「観賞のしおり」を発行して園内は勿論、外来者に配布招待する。本年春の公演を以て恰度五十回に及んでいる。

囲碁 人員六十名、年に一回瀬川良雄六段と岡谷三男三段が指導に来園される。参考書は、「棋道」及び寄贈に依る図書、年六回の支部大手合せや、棋譜研究会を行

う。

行事は春秋二回の選手権大会を始め、愛生、光明対抗戦、瀬川杯、本田、岡宗杯争奪戦を行う。他に西大寺支部との対抗戦も行う。又日本棋院長島支部である。

将棋 人員五十二名、大山前名人、灘八段外関西本部の高段者の指導を受く。参考書は、将棋世界、最新将棋全書、将棋大観、将棋は生きている等がある。毎月月例倶楽部戦や指導員による研究会、詰将棋募集、職員との親睦対抗戦を行う。行事としては春秋二回の将棋大会、春秋の選手権大会、光明園との春秋対抗戦をする他に岡山市、西大寺市よりアマ有段者が多数来園指導される。

新劇 人員は二十一名、外部からの指導者はなく、部内で研究し古参者の指導を受く。参考書は「テアトロ」「悲劇喜劇」「現代戯曲全集」等がある。サークル活動は春秋二回の公演（二本立）及び毎月の研究集会が行われている。発行誌はないが、公演案内書程度。最近の動きは健康度の不良から全般にやや停滞気味。

宗教団体

邑久支部

キリスト 人員一五〇名、河野 進牧師が来園、日曜礼拝を行う他、春秋の大祭、月例集会を行い、故人の追悼は其の都度行われる。

金光教 人員二十五名、岡山県联合会より指導者が派遣される。春秋の大祭を始め月例の集会等が行われる。

天理教 人員八十名、植田五郎氏が来園され、春秋の大祭や研究集会が行われる。

真宗 人員四二〇名、長田智海師が来園、毎月の礼拝の他、報恩講、花祭り、その他の行事がいとなまれる。

真言宗 人員二〇〇名、小野田勝芳師が来園、月例の礼拝を行う。行事は青葉祭、盆行事、花祭り、その他が行われる。

日蓮宗 人員六〇名、宮崎悔優師が来園され、礼拝説教が行われる。行事は御会式、花祭り、盆行事、その他がいとなまれる。

長島支部

カトリック 人員三〇名、神父は岡山市よりヴァン、ウヌーゼル氏が来園され、毎日曜日の礼拝、第一、第三日曜日の御ミサが行われる。又読書会や要理研究会を行

う。行事はクリスマス、復活祭がいとなまれる。その他声誌、カトリック生活、家庭の友等を閲読。

禅宗 人員一四四名、岡山市小橋町国清寺より華山恵光師が来園、毎月一日、五日、十五日、十八日に礼拝説教が行われる他毎月定例集会が行われる。行事は御誕生会（二月二十七日）、施餓鬼法要（七月十五日）、開山忌（九月二十八日）等がいとなまれる。その他大法輪、花園、禅の友を閲読。

プロテスタント 人員三八七名、牧師は主任牧師が大島常治氏、副が小倉兼治氏が来園、毎日曜日は一般礼拝、教会学校礼拝が行われる。毎週聖書研究会をもつ他月曜会、婦人部、青年会、其枝会等の集会を行う。行事はクリスマス祝会をいとなむ。その他月刊誌、あけぼのを閲読する。

真宗 人員六一三名、西本願寺直命布教師、軌保政重氏及び導使、藤井 善氏が来園、毎月八日、十八日、二十八日に礼拝説教が行われる。集会としては毎月八日、十八日、二十八日に定例集会をもち、月二回法要部のみの集会をもつ。行事は宗祖降誕会、報恩講がいとなまれる。その他不定期刊行だが「白道」がある。

天理教 人員八十三名で、岡山教区長植田五郎氏を始め、毎月婦人、青年の先生四名が来園され、毎第一日曜日、毎月十八日に月次祭を行い、毎月上旬に役員幹事会が開かれる。行事は春季大祭が三月、秋季大祭が九月にそれぞれ行われる。その他月刊誌みちのとも、陽気、天理時報、岡山教区報を閲読。

日蓮宗 人員一〇五名、岡山県宗務所、妙林寺より杉本上人が来園、毎月二日、十二日、二十五に合同法要が営まれる他毎月役員幹事会を開く。行事は花祭り、宗祖降誕会、御会式等が行われる。他に月刊誌みのぶ、光明、新世界、日蓮宗新聞を閲読する。

真言宗 人員三〇九名、岡山県都窪郡より布教師玉崎真禪師が来園、毎月五日、十七日、二十一日に定例法要が行われる。又定例集会、詠歌会等の集会をもつ。行事は青葉祭を六月、正御彰供を三月に行う。その他、聖愛、伝道、高野時報を閲読する。

四〇五 『愛生』の発行

(長島愛生園入園者自治会編『隔絶の里程』昭和57年刊)

「愛生」の発行

全生病院時代に对外アピールと入院生活の質的向上(光田)を目的に「山桜」の発行をつづけさせていた愛生園の幹部たちは、慰安会事業の一つとしていちはやく機関誌の発行を企画し、昭和六年の慰安会予算に出版及び印刷費一、〇五〇円を計上した(決算額は四一、一円九一銭、うち「愛生」印刷費千部八三円九六銭、同売上(一部一〇銭)二八円六〇銭、文芸賞金一六円九〇銭)。療養所運営上機関誌のもつ機能への期待と評価をそこに見ることができるといえる。

昭和六年十月、「来たり、見たり、勝ちたり」の三Vを表紙にデザインした創刊号が田尻敢(医師)の編集で発行された。内容は園長の巻頭文から職員や外来者の寄稿、患者の原稿は主として文芸作品で体験記が加わるといふもので、この形はその後長く踏襲された。印刷は東京まで出している(四号まで)というのも当時の事情を反映している。(その後は山陽新報社印刷部)

「愛生」発行の母胎である慰安会(昭和六年四月発足)の性格が「本園の別働隊」(愛生園年報)であり、編集、財源も長い間患者のタッチできないところではなされたため、その内容は園の方針を直接反映するものであった。

〔中略〕

戦後は昭和二十二年二月になつて復刊第一号が出されたが、戦後の特徴は入園者が編集に進出していったことである。

生き残つた患者たちは再び制作意欲を燃やしはじめたが発表する場所がなく原稿を綴じたまま回覧していた。印刷への要求はそうした中で高まり、各部会の代表は協議を重ねて「愛生」の復刊を園に要望したのに対し、施設側はそれなら入園者側で作品をまとめる労をとれということになり、当初は文芸作品に限られていたが編集への参加がはじまった。当時まだ文芸協会が結成されていなかったので、自治会文芸部長（津川）が業務の一端としてしばらくやり（昭和二十四年前半）、そのあと文芸協会の代表（千葉、大村）が引き継いでいった。昭和二十六年、月刊体制の確立とともに編集は患者作業の一つとなり、編集業務は患者側に委ねられた

〔後略〕

四〇六 心の糧を

（愛生園神谷書庫蔵『青年愛生』第二号（愛生附録） 昭和8年）

心の糧を！

川口 生

茲に青年愛生の発行を見るに至つたのは、吾人の文芸趣味の向上、延いては、読書熱の旺盛なことを裏書きするものと

して喜びに堪へない次第です。

目まぐるしいまでに急テンポを以て進転する社会の動向を認識し、想ひを千年の昔に馳せ、先人の思想に触れ、未来を予想し、魂を天外に遊ばし得るも一に読書に依つてのみ、更にすぐれた文学書、宗教書に親しむことによつて深く沈思し、人格が陶冶される。

「無識はそれが富に随伴して見出される時、初めて其の人の価値を落するものである」とは、ショーペンハウエルの読書論の冒頭句で有ります。

我等は富者ではないけれ共、それに代わるにタイムに恵まれては居ないだらうか。

社会から遠ざかつて静かな大気に呼吸する吾等にとつて読書が何物にも勝る慰めであり、向上の好伴侶であることを思ふ。

愛生園図書館は開園と同時に創設され、私達にとつて無限の慰勞となつて、その使命を果しつつ今日を迎へたのであります。

その蔵書は、文学、宗教、教育を主とした書籍約一千二百冊、之に短歌、俳句、文芸もの及び大衆雑誌合して一千冊ばかりで、是等は職員有志、広く一般篤志家の御寄贈になるも

ので、その数も次第に増加し図書館としての内容を名実共に誇り得るに至ったのであります。

殊に比較的少ない新刊書が贈られた時はファンの喜びは絶頂に達する有様です。

読者をみるに今是を自五月二十一日：至六月二十日、一ヶ月間の統計に依れば閲覧者総延数三千六百二十七名。貸出数五万四十三冊、になっている。目につくのは近頃になって女子の読書家が激増したことで、近時女性の自覚が智識の進歩を促進していますがその時潮が吾が愛生村の女性にも反映して読書の「レベル」を引き上げたものと考察される。

風雅会応募句の中に女子の優れた作品を数多く見受ける様になったのはこの傾向を如実に物語るものと考へ、私自身図書館に勤務する者として一人でも多く図書を利用して下さる事がどんなに嬉しいことか、折角の自分等の図書を自分の生活内容を豊富にする意味に於て御活用下されんことを……

斯くて吾等の図書館が一般の理解と同情によつて日々充実され、読書が心の糧となり、原動力となることを熱望する次第であります。

諸子よ！若葉の蔭に良言を繙く快感を味ひ給へかし！

風雅会当選句発表の日 図書室にて

四〇七 『露の芽』一年を回顧して

(愛生図書室蔵『露の芽』(創刊記念号) 通巻第一三号 昭和9年)

「露の芽」一年を回顧して 藤樹 浩水

月日の立つのは子馬の走るが如く我が露の芽もはや一年の月日は流れた。

かえり見るに去年の夏頃よりあさし兄は長島にも各療養所の如くに俳誌を出版したき旨を会合の都度、散策の都度話すのであった。けれども僕はまだ長島の俳句は日浅く幼稚なるために俳誌の出版は抽象的に考察するに無理であるかの如くに思ふのであった。始めは空しく返事をしてあまりに実は入らなかつた。けれどもあさし兄の熱辨はなかなかさめないで彼の努力は熾んで長島に俳誌出版の暁には誌上によつての句作力を捉し益々発展向上に導く事を述べるのであった。

一・俳誌出版後の発展促進 二・開園三周年記念出版 三・林医官外遊帰朝までの俳壇進歩の表示等であった。励ます彼の心情を汲み僕等も自覚し大決心と共に協力一致すれば出版出来得ることを覚えたのであった。かくて話は完まり三周年記念の十一月創刊号を出版したそれより続いて、林医官帰朝歓迎号まで発行し園長殿の尽力により松山市の赤十字病院の酒井先生に雑詠の選の勞を煩はし、子規と親友たりし析井愚

哉先生の御指導に預かり、又回春病院よりは六々子先生を迎え、尚今夏一杉、暁水両先生の御来島等々の長島俳壇の充実の礎となりつつあるは園長始め職員の御援助と当難波先生の御尽力の賜物と深く感謝するの外はありません。

茲に恙がなく露の芽の一年を迎へた事は歡喜に堪えません。今後も益々露の芽の健やかに成長するを祈るものであります。

(昭和九年十月五日 記)

露の芽の現在と将来の理想 小松 天峽

露の芽を創刊して茲に1周年を迎へることの出来ましたことは私達の大いに喜びとするところであります。

此の小さき露の芽も創刊当時に比して内容に於て大いに充実に来ましたと思ふのであります、之れ即ち社会の人々の理解と同情、雑詠、園外雑詠両選者の丁寧なる指導、並に各療養所の病友投句家諸氏、其の他多くの物質的、精神的の御援助に依ることと厚く感謝致します。それについて私達は常に露の芽の発展向上について考究して居りますが浅学非戈の悲しさに皆様の御期待に副ふべき何等の術を知らないことを非常に遺憾に思うのであります。

これに対し諸氏よりしばしば激励され或は注告を受けるのであります。私達も露の芽の発展向上の爲めには雑詠、園外雑詠を合併しても早くはあるまいと思つてあります。然し此の問題は両選者の諒解を得なければならぬのみならず私達も慎重に考へなければならぬ問題である。故に今直ちに実行出来ないまでも遠からず其の機会の來ることと思ひます。

尚、又印刷についても考へる所で何とかして立派な印刷にし立派な俳誌にしたい、これが私達一般の叫びであります。現在の謄写版刷を続けて行くには幾多の困難がある。露の芽の発展とともに益々其の度を増すばかりである。又これを印刷するには目下否将来とても露の芽の經濟状態では到底実行は不可能であると思つてあります。

然らば、此の問題を如何にして解決したらよいか、それは私達同好者は一致協力して努力すること勿論である。又園長並びに園当局の同情と理解、入園者の自覚、この熱と力に依つて其の実現を期する外はないと思つてあります。それに対して私達は努力を致す考へでありますとともに名実ともに完備したる理想的俳誌露の芽の出現の一日も早らんことを切望して止まないものであります。茲に一言所感を述べて擱筆します。

(十月十二日夜記)

野田 トヨ

四〇八 明石海人賞の設立

(愛生園蔵「一般寄附金関係書」昭和14年)

昭和十四年十一月 起案

会長〈園長〉[㊦] 理事〈庶務課長〉[㊦]理事〈医務課長〉[㊦]書記〈主任〉[㊦]

明石海人賞二関スル件

今般故明石海人ノ遺族 実母野田トヨヨリ本会ニ対シ金参百
 円ノ寄附申出有之候処右金額ヲ一般寄附金トシテ受納ノ上寄
 附者及故人ノ意思ヲ相受ケ別紙ノ通園内三文芸団体ノ受賞者
 ニ対シ毎年右寄附金ヨリ生ズル利息相当額ヲ本会ヨリ支出致
 シ賞品購入ノ上給与相成可然哉

寄附申込書

会長[㊦] 理事[㊦] 書記[㊦]

一金 参百円也

右は故明石海人の遺志に依り貴園の文芸奨励金として寄
 附致し度候間御納め下され度此口御願ひ申上げます

昭和十四年十一月二十日

愛生園長 光田健輔殿

〔手書〕

明石海人賞制定の件

一. 財源、明石海人の印税の内参百円を故人の遺言により同
 病者の文芸奨励費として、遺族より寄附し来れるを以て、
 毎年一回其の利子を以て「明石海人賞」として授賞す。

二. 授賞方法、貯金利子を三等分し、之を俳句、短歌、詩謡
 の三団体の各一人に授賞す。推薦方法としては、(一)
 実作家として優秀なること、(二) 人格的に無難なるこ
 と、

(三) 所属団体に功劳あること、の三点より考察して
 適當なる人を二人づつその所属団体より推薦せしめ、園長之
 を決定す。

三. 期日他、授賞期日は毎年十一月十日とし、賞品は可及的
 書籍とす、同人に再度授賞せず。

〔ガリ版刷〕

明石海人賞制定の件

一. 財源 海人の遺族より故人の遺言により同病者の文芸
 奨励費として慰安会に指定寄附し来れる参百円

の利息を三等分し短歌、俳句、詩謡の三団体の代表者に奨励として交附す。

二. 人選法 右三団体より各二名づゝ左の条件によりて推薦せしむ。

(一) 実作家として優秀なること。

(二) 所属単体に功労あること。

(三) 人格的に欠点なきこと。

各二名の内一名づゝを園長之を選定す。

三. 賞品 現金は之を支給せず、受賞者の希望する書籍を購入し之を与ふ、但し二円七十銭以下なること。

四. 期日 毎年十一月十日の「み恵の日」とす。

五. 一度受賞せる者は再度受賞する能はず。

四〇九 文化運動の反省

(愛生園神谷書庫蔵『新緑』第二卷第三号、秋季号 昭和26年)

文化運動の反省

津川 冽

黒一色にぬりつぶされた長い戦争の時代に別れを告げた昭和二十年の終り頃より全国的に燃へ上がった文化運動にはすさまじいものがあった。然し其の實質は誠に貧弱なもので長い

間歌も自由に唄へなかつた苦しみに対する反抗乃至は敗戦といふ打撃より受けた虚無感に対する虚勢に対するものが多かつた。内容はどうでもよい、なにかなければをれない、何かの刺戟の中に突き入つてゆきたい感情の所産にすぎなかつた。

園に迎へた慰問団の大半もこうした類のものであつた。内容を通じて慰問といふよりも壇上にある人自体の娯楽といった様な極端なものすらあつて一言にして言へば足が地についてゐない文化運動であつた。戦後六年にして漸く講和の年を迎へて園内状勢も平静をとりもどし人心も亦地について来た。そうして文化運動の実態も実生活に強く連絡した着実なものへ移行して来つゝある。こうした一般社会の文化運動の反省期に於ても我々愛生園内の文化活動は一層着実に生長し発展して行きつゝあることを確信する。文化は遠いところにあるものではない。高いところにあるものでもない、それは我々の日常生活の中にある。

光明園及青松園との交流もお祭騒ぎの期間もすぎて各園の文化団体相互間に其の接触面に於て三園相集り真剣に我々病者の生活の在り方を追求してゆかうとする機運が盛り上がりつゝある。こうしたことも将来に於て必ず実現されなければ

ならない問題である。

三園各々異つた機構と制度の中に生活はしつゝも同じ病氣と国家施設の中に療養してゐると云ふ根本的なものにつながつてゐるものであり病者の生活のあり方が物質的なものより精神的なものへと移りつゝあるとき各園共に文化団体の健全な成長と発展こそ望ましいことであり、延いては我々の生活をより高度なものへと導いてゆく要因でもある。

四一〇 永瀬清子と長島詩話会

(愛生園神谷書庫蔵『黄薔薇』第一四三号、永瀬清子追悼号

平成7年刊)

永瀬さんと長島詩話会

島田 等

永瀬さんは大江満雄さんとともに、戦後の長島詩話会（結成は昭和九年）がとくにお世話になつた方でした。

永瀬さんと大江さんは同年で、戦前から面識があつたとききました。後年、来訪された大江さんは、「自分と永瀬さんと、どちらが元気に見えるか」といわれ、「先生はまだ杖をついていないから」というと、「そうか、そうか」とご機嫌でしたが、大江さんの方が先に逝かれました。

私はいま「大江満雄論」みたいなものを書いていますが、

大江さんが戦前、転向や戦争詩の問題をかかえこんだのにたいし、永瀬さんは早くから「グレンデルの母親」の視点を持たれてきたことが、大戦中の男性詩人たちのような、だらしない「勇ましきや、大勢への弱さ」を、持たれなかったのではないかと思ひます。ともかくお二人からは、年をとることのすばらしさを見せていただいたと思つています。

永瀬さんは、昭和二四年以来、たびたび愛生園を訪れてくれています。架橋直後の昭和六三年八月、最後になつた訪問では、高松に越して来られた旧友の戸塚八重さんとご一緒でした。そのとき永瀬さんが朗読された詩が何だったか憶えていませんが、戸塚さんに促されて、美智子さん（現皇后）の、招きを断わりきれなくなつて、詩の話に出向いたいきさつを話されました。

昨年春、私が詩集を出したとき、次号の「黄ばら」にそれについてふれたいという葉書をいただいたのですが、先生の死によつてそれを目にできなくなつたのは残念です。その葉書の中の詩は、いまはお別れのことばのように残されています。

人は嗔えど悔ぞなき

愚かに長き夢みしが

咲くは野花のまことに

風たつとみれば散りぬべし

四一一 『楓』の創刊と復刊〔抄〕

〔邑久光明園入園者自治会編『風と海のなか』平成元年刊〕

「楓」創刊

分散委託されていた昭和十一年五月、「楓」創刊号が世に出た。四八頁、月刊、編集今谷逸之助（職員）、発行は保養院慰籍会、現在の慰安会である。

「楓」という誌名について原田院長は創刊の辞で次のように記している。

「昭和九年五月二十八日皇太后陛下より楓の実生百五十本を本院に賜はり、陛下の有難い大御心を久遠に肝に銘じ、朝に夕に奉戴し奉らんとし、入江為守閣下の御高見を伺い、特に本誌名として楓の一字を拝戴したのである……」。創刊号から昭和十三年六月号（落成式記念号）までの各号は、委託時代を反映して、各療養所委託グループの動静を伝えること、復旧工事の状況説明等、情報提供を主眼とした編集となつている。

「楓」復刊と文芸団体

終戦の翌年二十一年に発足した文芸会は、その作品発表の場として「楓」復刊を企画した。しかし、欠乏の時代とあつて機関誌「楓」の発行は無理であつた。そこで考えついたので手書きによる「楓」の発行であつた。

文芸会に所属する詩謡会、短歌会、俳句会の幹部が編集同人となり、文芸誌「楓」として昭和二十二年一月一日第一号を発行した。四百字詰の原稿用紙をペン字で埋め、厚手の表紙で綴じ合わせた、まさに手作りの冊子で頁数は四〇頁程度、発行部数は一部で、希望者二〇余名に回覧するところから出た。

二十三年の新年号で、新春文芸の入選発表をしている。評論の部は「課題、再建日本に於ける吾等の立場」選者神宮園長、（二位村田良人、二位瀬川秀雄）。五月号からガリ版刷りになり、発行部数も増やし友園にも送るようになった。

こうした経過を辿つて、光明園の機関誌「楓」として復刊したのは、昭和二十四年一・二月合併号である。A五判四八頁で、復刊第一号の編集は職員の木下吉雄が担当しているが、二号からは自治会文化部の選任によって山川清が担当してい

る。以後入園者によって編集は受け継がれてきた。

復刊当初は二か月に一回、合併号として発行している（月刊となったのは二年後の昭和二十六年新年号からである）。機関誌としての視点から、幹部職員と執行部の懇談会の記事、役員抱負、あるいは青年の欄、少年少女の頁等、いろいろ企画しているが、全体として文芸主体の誌面となっている。

四一二 読書生活の展望

（楓編集委員会蔵『楓』第四巻第四号 昭和25年）

読書調査表から

須賀照二

園内で現在如何なる本が読まれ、どのような書籍が希望されているか、購読者はどのくらいだろうか、更には図書館の利用、読書時間等、こうした事柄を知るために、去る六月十日二日青年団で読書調査を行ったのである。この調査の対象は二百名で男女の内訳は男子一三〇名、女子七〇名であった。

毎月講読をしている人―これは三七％で個人講読、グループ講読に分けると、個人講読者はグループ購読者の二分の一である。療園の生活状態ではグループ購読者の多いのは当然の事であろう、このグループ講読の中で宗教誌の多い事は注

目される。宗教誌に続いては婦人雑誌が多かった。

次にあなたの好きな作家―この質問に対しては吉屋信子、吉川英治が上位を占め、続いては竹田敏彦、川口松太郎、谷崎潤一郎、島村藤村、芥川龍之介等がある。総勢二九名の作家が記入されていたが意外に思つたのは所謂戦後派作家と目される梅崎春生、野間宏、三島由紀夫等の名前が見当たらなかったことである。

読みたいと思う書籍―月刊誌では文芸春秋、キング、リーダーズダイジェスト、新潮、ロマンス、婦人雑誌が上位の部で、約三〇種類の雑誌名が記入されていた。これらの本を大別して総合誌、文芸誌、宗教誌、娯楽誌とすると、娯楽誌五〇％、総合誌二五％、宗教誌一三％、文芸誌一二％、となつた。単行本では細雪、きけわだつみのこえ、石中先生行状記等、が上位の部であつた。この中に少数ではあるが辞書類の希望があつた事は見逃せないと思う。文芸辞典、哲学辞典、世界人名辞典、年鑑、百科辞典等が備え付けられて、必要な時に行つてノートして来るといふ形式にすると良いのではないかと思う。今までおき忘れられた感のある此の面の充実も今後なされるべきと思う。単行本の中にヘッセ、ジイド、モンテーニュ等の作品が記入されていたが、極めて少数であ

つた。

次に一日の読書時間―では、一時間が二九%、二時間が二三%、三時間乃至五時間の人は少数であつた。時間がありすぎて読めない、時間がないから読めないとか、色々な口実で本を読まない事を笑いにまぎらすが、時間的に恵まれている園内では時間と読書は余り関連性はない様である。

次に男女比率であるが、各項とも余り大きな差はなかつた。読書傾向、本の選び方では異つた現象が見られた。即ち女性間では実用的な婦人雑誌が圧倒的であり、綜合誌、文芸誌は殆んど男性で占められており、娯楽誌、宗教誌は余り大差はなかつた。

ところで本を選ぶ方向と言うか希望書籍の中では古くから、戦前から発売されていた本に、名の良く通つた本にと動いている様に思つた。文芸春秋にしる主婦の友、キング、婦人倶楽部にしる現在その本の内容が充実しているかも知れないが、反面懐古的な気持、又通信講読の弊である広告と内容の相違等が少なくと考えられる点（当然そこには出版社への信頼が含まれている訳で）そうしたものが作用しているのではないかと思われる。

この調査を終えて強く感じさせられた事は図書館の充実と

いう事である。園内の読書水準を云々するまえに、先づ良書の完備を共に考えなければならぬと思つた。昨年度芥川全集が図書館に揃つた時の状態、又外部から寄贈されたり、個人で時々購入した定評ある書籍が多くの人に読まれているのを想い合す時、図書館の充実は重大な意味をもつものである。読みたい書籍、希望の本を記入した人が八〇%あり、現在購読している人は三七%、この数字は図書館の貧弱を雄弁に物語つている。

そしてその充実を切実に叫んでいるとも言える。著名な書籍の紹介記事を新聞の一隅で読み、感心した様な顔をしなければならぬのは残念なことである。一戦没学徒がその手記の一節で「岩波全集の広告欄を眺めて俺の魂の慰安とせねばならないのか」と嘆いている。この悲痛な叫び声が判りすぎる程判り、余りに身近な問題の如く感じられるのが情けない。書籍、読書が隔離された療園の中の生存を余儀なくされている吾々にとつて、大きな意義を有している事を想う時、一日も早く吾々の図書館が充実される事を願つてやまない。

（一九五〇、七、四記）

四一三 開園一周年記念愛生座の演劇会

〔中国民報〕昭和6年11月21日

開園一周年記念愛生座の演劇会

十一月二十日を以て開園満一周年を迎へた邑久郡国立長島愛生園では二十日午後一時より開園記念式を行ひ引き続き二十一日、二の両日午後一時より園内礼拝堂で入園者よりなる愛生座第一回演劇会を公開した、当日の来賓は村田牛窓署長、赤松県会議員、隣接町村長その他村内有力者等約二百余名にして何れも設備の完備と熟練せる芸術に驚歎した

四一四 愛生座第十一回公演案内

〔県立記録資料館蔵 仙田氏収集資料 一般社会事業／济世団体

関係綴〕昭和11年

拝啓秋冷之候□□愈々御清穆の段奉慶賀候陳者恒例に依り当園入園者の組織せる愛生座第十一回演劇を来る十月二十四日、二十五日の両日晴雨に不拘正午より左記プログラムに因り当園礼拝堂に於て公開致候条万障御繰合御観覧の栄を賜り度此段御案内申上候

昭和十一年十月二十一日

岡山県邑久郡裳掛村

殿

長島愛生園長 光田健輔

二伸 御来しかくの際は此の状御持参の上受付に御示し被下

度

記

- | | | |
|------------|----|----|
| 一. 地震加藤 | 一幕 | 一場 |
| 一. 菅原傳授手習鑑 | 二幕 | 二場 |
| 一. 直八子供旅 | 三幕 | 六場 |
| 一. お江戸乃風評 | 一幕 | |

以上

四一五 青年団演奏会の願書とプログラム

〔愛生園蔵「教育関係書類」昭和16年

願書

七月十五日音楽団演奏会ヲ左記プログラムニテ開催致シ度候條何卒御許可相成度此ノ段御願ニ及ビ候也

昭和十六年七月二日

学芸部長 藤田政義^印
 総代 伊原国策^印

〔朱書〕
一許可相成可哉

但日取ハ遅延ノ見込也

七月二十日実施

長島愛生園長 光田健輔殿

園長^印 庶務課長^印 主任^印

受付印 昭和十六年七月十日

十四. 歌謡曲 歩く歌他 一.

十五. テノル独唱 出船他 二.

十六. 舞踊 証城寺の狸林他 一.

十七. フィナーレ 皆んな兵士だ弾丸だ

十八. 愛生園歌

四一六 愛生座公演願書と届出書

(愛生園蔵「教育関係書類」昭和17年)

願書

愛生座第二十三回秋季公演ヲ左記期日ニ依リ公演致度條御
許可被下度此之段及御願候也

昭和十七年九月二十六日

学芸部長

波多野勘一^印

入園者総代

藤田政義^印

^[朱書]
「公演相成可然哉」

長島愛生園長

光田健輔殿

園長^印 庶務課長^印 営繕^印

左記

一 歌舞伎 勢州阿漕浦平次住家之段 一幕

左記

一. 合奏 国民進軍歌

二. 舞踊 良寛和尚さんと筍

三. ハーモニカ合奏 行進曲集

四. 歌謡曲 建設の歌他 一.

五. 歌謡曲 娘泪单船他 一.

六. 舞踊 故郷の廃家他 二.

七. ハーモニカ合奏 歌謡曲集

八. 合唱 海ゆかば他 一.

九. 舞踊 大政翼賛の歌

十. 合奏 海を渡る荒鷺

十一. 歌謡曲 荒城の月他 一.

十二. 舞踊牛若丸他 二.

十三. ハーモニカ合奏 歌謡曲集

一 時代劇 義士外伝 高田馬場 三幕

一 歌舞伎 近江源氏先陣館

小四郎恩愛之段 一幕

一 喜劇 仇討笑話 功名愚談 二場

右ノ劇題全仕用時間五時間半ノ予定

二六〇一春季第二回公演記念

吉田絃二郎作 名残の梅ヶ香

四一七 舞台中継放送につき詫書

(愛生園蔵「教育関係書類」昭和17年)

御詫書

今般秋季愛生座公演ニ際シ舞台中継放送設置方ノ御願ヲオ

コタリ誠ニ申訳コレナイ処御詫申上候。

昭和十七年十月二十二日

田中貞一

長島愛生園々長

光田健輔殿

小金井勝一座御慰問記念(昭和十六年五月二十三日)
光明劇団第参回秋季公演記念

菊池寛作 時勢は移る

門脇陽一郎作 喜劇 やきもち読本

額田六福原作 真如

岡本綺堂作 幡随院長兵衛

岡本綺堂作 権三と助十

北村寿夫作 祖国の火

四一八 光明劇団公演題目

(光明自治会蔵「祝二千六百年写真帳」昭和15〜19年)

光明劇団写真帳〔抄〕

光明劇団第一回公演(昭和十五年十一月十日)

真山青果作
第四回春季公演

荒川の佐吉

真山青果作

おとら狐

曾我廼家五郎作

喜劇銚三本

岡本綺堂作

尾上伊太八

小林宗吉作

時代喜劇 剣客商売

昭和十八年秋 愛生座公演

昭和十九年三月二十八日

河竹繁俊作

神明恵和合取組 め組の喧嘩

松竹少女歌劇団一行御慰問

菊池寛作

丸橋忠弥

仲木貞一作

柿実る村

四一九 愛生座の光明園公演

岡本綺堂作

番町皿屋敷

(愛生園蔵「入園者教育関係綴」昭和22年)

第五回秋季公演

昭和二十二年十月八日

吉川省三作

殉職美談 噫々中野看護婦長

文教部長 津川 洌

野澤純作

助人仁義

総代 田中文雄

第六回春季公演

長島愛生園長

曾我廼家五郎作

喜劇 バケツの水

光田健輔殿

五郎作

天使?悪魔?

愛生座光明園公演二関スル件

岡本綺堂作

鎧櫃

愛生座秋季公演終了後光明園ニ於テ公演致シタク存シマス

中村吉蔵作

桜田門

何卒御許可ノ上然ルベク御手配下サル様御願ヒ申上ゲマス

綺堂作

時代劇 修善寺物語

第七回秋季公演

運動会ニ光明園選手招待ニ関スル件

池田大伍作

男達□□□

十一月^(ママ) 青年団主催運動会ニ左記ノ通り光明園ヨリ選手ヲ

真山青果作

頼朝の最後

招待シ對抗試合ヲ行ヒタク存シマス

何卒御許可ノ上然ルベク御手配方御願ヒ申上ゲマス

記

青年団選手 五名

一般男子選手 五名

以上

四二〇 愛生座の大島青松園公演

(愛生園蔵「入園者教育関係綴」昭和22年)

昭和二十二年十月二十一日

文教部長 津川 洵

総 代 田中文雄

長島愛生園長

光田健輔殿

愛生座大島青松園公演ニ関スル件

過日礼拝堂ニ於テ上演シタル愛生座秋季ノ芝居ヲ大島青松

園ニ出張シ上演致シタク存シマス

何卒御許可ノ上然ルベク御手配方御願申上ゲマス

尚大島青松園出張人員ハ約三十名ノ予定デアリマス

四二一 音楽バンドの結成

(愛生園神谷書庫蔵『青年愛生』第二号(愛生附録) 昭和8年)

音楽バンドの組織へ

鷗 生

音楽は今更駄弁を弄するまでもなく、無条件に首肯出来るやうに生活内面の糧である。理想は止さう。

愛生園に於ける趣味的音楽に就いて、又青年団音楽部に就いて、感想を述べてみやう。

私が入園してから気持ちに落ち着きが出来てきた時、先づ心に浮んだのは音楽であった。音楽を普及させねばならないと云ふことであつた。多くの場合音楽趣味は金のあることと時間の余裕のあることを前提とする。楽器によって自ら奏するにしても、レコード、ラジオによつて聞くにしても同様である。

それ故吾々の経済状態を考へて比較的容易にそれを満してくれるものとは考へた時頭に浮んで来たのは、あの銀色の可愛い楽器ハーモニカだつた。

彼女はその何に飾り気のない小さな体から吾人の望むどんなメロデーも真面目に懸命の努力を払ってくれる。

彼女をプロ娘の異端者だ、貧乏人の私生児だと軽侮した所謂ハーモニカの玩具時代は既に昔となつてゐる。けれ共その

悪名は無理解な無口覚な一部の人々にとってはそうした頑強な先入観があるので未だに侮蔑されている。そして又他の優良楽器（？）からは常に圧迫され下積みになれつつも認められる日を待ちつつコツコツと努力を続けて行く真面目さが、絶えざる愛着と魅力をあの小さな楽器に引きつけるのである。で、私は二三の同好者と相寄って同人組織を以て貧しい乍ら努力を続けつつ一年を経過した。

その間に青年団に音楽部が設立されるや、そのまま青年団音楽部、愛生ハーモニカバンドてふ名を頂戴して現在に及んでいる。がまだまだ揺籃時代の域を出でず、こんなものが出るか自信のある返答はでき得ない。

とて転じて一般の普及状態をみるに一年前に比して比較にならない勢ひでその趣味は、拡大されている。音楽聲る此頃、ふと耳を傾け給へ、暮れて間もない瀬戸の夕霧の中に静かな音楽のハーモニカの音色を聞くことが出来るでせう。昼の勞れはすぐ読書にも飽いて何となく軽い倦怠を覚える時、爽やかな、つつましかな彼女のささやきは無限の親しみをもって迫って来る。すがすがしい浴衣がけで岸の方に腰かけて流すメロデー、夏の夕べを彩る愛生園風景の一つである。

この様にして先づハーモニカに依って音楽の趣味が漸次向

上されて行くことであろう。

近くマンドリン倶楽部が生れ、バンドとしての補助楽器も備へられんとし、風琴、銀笛そしてバイオリン等を包合した大バンドを組織して一大音楽殿堂を築かん意気込に燃えている。

その先報として近く第一回夏季演奏会が開かれる予定である。美しく生れ出た愛生音楽団が皆誠の理解と熱誠なる後援の母乳に育まれてすすくと健やかに生長して行く姿を眺めたい心でいっぱいである。

拙い稿を終るにのぞんで、絶えず指導報達して下さいる吾等の大きな理解者難波氏御兄姉に衷心より感謝致します。

(昭和七・六・二四)

四二二 ハーモニカバンド「青い鳥楽団」

(愛生編集部蔵『愛生』第五八巻第六号 平成16年)

幸せなら手をたたこう

(ハーモニカバンド青い鳥楽団・後編)

元青い鳥楽団員

近藤宏一

青い鳥楽団が民謡クラブの仲間たちと一緒に、園内の精神

病棟に初めて招かれたのは、昭和三八年の七夕の日であった。この頃の重病棟の運営は、昭和二九年から始まった完全看護体制への切り替えがほぼ完了していて、精神病棟も、神谷美恵子、高橋幸彦両先生の診療の元に、新しく配属された田中孝子婦長をはじめ、看護婦、介護員らの手によって、医療を基本とする合理的な新しい看護介護が実施されつつあった。青い鳥楽団が招かれたのもその一環であったと言われる。

古い寮舎のままの狭い廊下に座布団を敷いて膝を接するようにならなうに私たちが位置につくと、開かれた窓から海の風が快く吹き込んできて、飾り付けの笹の葉がさやさやとそよいでいた。広間の中央あたりをステージになぞらえ、まず病友の徳山のおじさんが故郷の民謡「安来節」を三味線の音に乗せて元気いっぱい、宮さんと小薮君とは得意の歌謡曲を、私たちのハーモニカの音も弾んで、看護婦さんたちの美しいコーラスが何曲も続いた。そんな中に、大阪から診療に来ておられた高橋先生が「少年老い易く学成り難し」を朗々と吟じられるなど、病棟内には拍手の絶え間がなかった。冷えたミルクコーヒーをいただきながら、爽やかな元気をもらったのは、かえって私たちの方ではなかったか。

高橋先生が、ご自身の病院、大阪府茨木市総持寺の茨木病

院へ、私たちを招こうとして園長と交渉されたのは、昭和四十一年九月ごろだったと記憶している。ところが園長はお許しにならなかつた。どうして。らい予防法の厳然と生きていた時代、夜行列車で旅行中の患者を発見した車掌は、強制的に途中下車させたとか、路線バスに乗ろうとして拒否されたとか、地元の村の店で買い物しようとして断られたとか、そんな出来事が茶飯事の頃の事。しかし少しも怯まなかつた高橋先生、しかも、それをサポートしたのは当時の楊井総婦長さんや各婦長さん方であったと聞く。

「不自由な患者諸君を大勢外出させるのは心配でならない。それに、バスをチャーターする予算がないんだよ」と園長、「そんなことなら、それは私たちが・・・」

あれやこれやいろいろあつて、結局園長はお許しになる。

青い鳥楽団一行二十五名が、初めて本土の土を踏んだのは昭和四十二年五月十二日であった。バスは東へ、兵庫県を横切り名神高速道路に乗り、茨木市北部の田園地帯に、目指す病院の建物を発見したのは昼ごろであった。大勢の人々の歓迎を受け、心からのもてなしを受け昼食をとり、演奏会は予定通り始まった。周囲の病棟の壁に張り巡らされた紅白の幔幕、「長島盲人会青い鳥楽団歓迎」の横断幕、広場の片隅に

しつらえた特設ステージに私たちが着席すると広場はもう大勢の人がいっぱい、院長奥西先生の歓迎のご挨拶、長島盲人会谷本会長と上田政子マネージャーのお礼の言葉に続いて、私たちは半年にわたる練習の成果を、次々に吹き込んでいった。私たちの方からは、かわい子ちゃんのかおるちゃんが、「白樺に涙あり」を、九城君は国重看護婦とデュエットで「ぼらが咲いた」を、権ちゃんは十八番の「浪曲子守唄」を唸ってみせて、場内の爆笑を集める。一方、病院の皆さん方は、「東京の灯よさようなら」「高校三年生」など、次から次へと沸き返る拍手に迎えられて歌い続けられる。中でも心に残ったのは、「たばるさか田原坂」であつた。元愛生園の看護婦（今は市内あえは饗庭クリニツクの奥様）の饗庭悦子さんが愛用の琴を携えて来て私が楽譜をお送りしただけで約束通り見事に和洋合奏してくださつた。いつまで経っても私たちを忘れないで快く協力してくださる琴の音色は異郷の空の下でも美しく響いた。

やがて、一時間余り、演奏会の終わりが近づいた頃、司会者の発案で「幸せなら手をたたこう」の全員合唱が始まった。会場の三百名の人々の中には、歌うことのできない人々もいたはずだが、大方の人々は手を打ち声をあげ、そのどよめきが周囲の病棟の壁に反響して、見る見るうちに大合唱となつ

て広がっていった。

幸せならてをたたこう パッパッ

幸せならてをたたこう パッパッ

幸せなら態度でしめそうよ

そら みんなで手をたたこう パッパッ

演奏しながら私はふと思った。この歌の言葉のように、幸せなら手をたたこうと呼びかけられて、はい幸せですと答え得る者が、この中に私たちを含んで何人いることだろうか。一人もいないはずだ。ハンセン病を病む者に対しても、精神病を病む者に対しても、世間の目はあまりにも冷たい。幸せなどどこにもないはずだ。それなのにこの歌声この手拍子は、いったい何だというのだろうか。言い知れぬ感動のうちに一曲が終ろうとした時、司会者の方が耳元で「奥西院長がアンコールをとおっしゃっています」と言われた。歌声と拍手とは再び湧き上がり、五月の茨木市の空へ渦を巻きながら昇っていくように思えた。

この演奏会には大勢の人々が駆けつけてくださった。元愛生園の看護婦で、今は滋賀県の琵琶湖学園の職員として働いておられる浦あきこさんが、ボーイフレンドの田中さんと一緒に、この近隣の町に社会復帰を果たしているIさんが、そ

して一燈園の江谷林蔵先生や大阪市立盲学校与野福造先生も懐かしい励ましの言葉をくださる。さらにFIWC関西委員会のキャンパー数名とボランティアグループ「念ずれば花ひらく会」の皆さんとは、後年、毎年園外に私たちを導き出してくださるようになるのも、一重にこの全員合唱「幸せなら手をたたこう」が原点になっていると私は今でも信じている。ちなみに昭和四十三年六月二十四日、大阪市内森の宮、大阪府立厚生会館文化ホールにおけるFIWC関西委員会主催「鶴見俊輔先生の講演と青い鳥楽団を聴く」、あるいは、「昭和四十六年五月二十九日、大阪道頓堀の朝日座における「山田無文老師の講演と青い鳥楽団を聴く夕べ」など、大阪から京都、名古屋を経て、やがて東京に到達するのは昭和五十年十月二十七日都内有楽町第一生命ホールにおける「愛と希望の音楽会」それであった。

高島園長は、初めの茨木病院訪問の時にこそ厳しかったが、その後はすっかり変わって、常に私たちを励まして導いてくださるようになった。この東京の時にも、主催の北野資子様（もとし）に対して、楽団の宿舎のことや楽器運搬のことなど細かに指示し協力してくださった。さらに本番の時には、午前と午後二度にわたって、自らステージに立ち、会場数百名の人々

と三笠宮朋仁殿下（ともひと）に対してハンセン病の実態を熱心にスピーチされたのは有意義であり感謝であった。

振り返ってみると、重症不自由者十二名によって結成されたこの青い鳥楽団は文字通り泡粒のような存在であった。それが楽団員の努力と大勢の人々の善意の積み重ねによって、ついにこの東京まで来てしまった。園内演奏三十二回、園外十三回、この長い旅路を顧みる時、それはやはり、あの茨木病院における「幸せなら手をたたこう」にたどり着く。さらにその糸を手繰っていくと、園内の精神病棟におけるあの七夕祭りのパーティーに帰着する。社会の片隅に追い詰められた者同志のこの友情を私は忘れないでいたいと思う。ハンセン病は残酷な生涯を私たちに強制した。そんな中で、懸命に生きることを楽団は教えてくれた。楽団は青春であった。

2 スポーツ

四二三 愛生青年団の沿革

（愛生園神谷書庫蔵『青年愛生』第一号（愛生附録） 昭和8年）

愛生青年団の沿革について

修養部長 横内武雄

昭和七年二月二十日 結団式挙行、団則の制定、役員任命あり。茲に愛生青年団生る。

四月三日、閲団式。五月四日、団の事業として新グラウンド開拓工事に着手す。九月二十日 青年団大会開催、自警、消防、修養の各部の施行細則制定発布さる。式後親睦会を開く。

九月二十九日、青年団必携印刷発布さる。十月一日、消防部編制部隊決定。十月十七日、青年団主催秋季運動会盛大に挙行せらる。十月二十九日、相撲大会。十一月三日、紅白対抗野球試合あり。

十二月三日、岡山公設消防組野球チームを迎へて、我が愛生チームと野球試合を挙行す。十二月十七日、ピンポン大会。

十二月十八日、山陽新報野球チームを迎えて一戦を交ふ。昭和八年一月十三日新春第一回の幹事会を招集し、毎月二十日を「青年デー」とするの件を決議す。一月二十日、第一回青年デー、団体訓練、消防演習並に新年親睦会開催。一月三十

一日、午後失火によりて、山火事を起す。消防部は直ちに之が消火に努め大事に至らず消し止む。後、臨時班制を定め、之が警備にあたり、徹宵警戒をなす。

二月二十日、第二回青年デー団体訓練、焼松材整理、親睦会。三月二十日、第三回青年デー団体ゲーム練習。

愛生青年団の沿革と云つても右記の如く、団の結成以来今日まで未だ満一年余を経たばかりであるから、書く可き事は大してない。然しながら、今静かに発団以来の事を回顧して見ると此間、短日月ながら相当の紆余曲折があつた様に思ふ。今それを當時を回顧しつつ成る可く詳しく書いておきたい。

◆昭和七年二月二十日この日は我々の永久に記念すべき団の誕生日である。午後、礼拝堂に於いて結団式が盛大に挙行せられ、団則制定、役員任命及新団長の訓話等があり、愛生青年団は茲に榮ある呱呱の声をあげたのである。其後、三月中旬に団服、団帽、団靴が支給せられ、以後、当分の間、毎日午前中団体訓練を行った。

○四月三日には、第一回閲団式を日出グラウンドに於いて挙行、団長、副団長、来賓、難波氏の検閲を仰いだ。式後、分列行進を行った。

○青年団の事業として、何かやり度いと思つた矢先、園当局より新良田海岸に面した山峡にグラウンドを開拓してはどうかとの提案があり、幹部及各部長の協議の結果、愈々この事業を引受ける事に決定し、全員を五班に分ち、各班に班長を置いて、之が統制をとり、毎日一班宛出動して作業する事にな

った。かくして、五月四日より第一班より作業に着手し、初めてその鋤入れをしたのである。

是迄は、団の大綱として、団則はあつたが、其の具体的な方法を定めたものは、何もなかった。団体訓練は随時之を行っていたが、どちらかと言へば消極的なものであつた。ここに於いて、自警、消防、修養の各部長が主となつて幹事との数回の協議の結果、青年団々則施行細則なるものを起草して、団長の決裁を仰いだ。九月二十日の青年団大会に於いて、団長の裁可を経て之が制定を見るに至つたのである。想ふに青年団が活発なる行動を開始したのは、これより以後の事である。我々はこの施行細則の定むるところによつて、今日まで具体的な種々の事業を遂行してきたのである。

○秋季体育行事のトップとして、十月十七日は運動会が入園者全員を挙げて、盛大に挙行された。是は園の行事としては―今日迄の―最も華かなものの一つであらう。続いて相撲大会、紅白対抗野球試合、ピンポン大会が逐次熱狂的な期待を以て開催せられた。

本年の最後を飾る事件として、十二月三日には、岡山公設消防組合野球チームを迎へて、我が愛生チームと華々しい一戦を交へた。之が当園に於ける対社会チームとの試合の嚆矢で

ある。創立第一年はかくして暮れて行つた。

○昭和八年一月十三日、新春劈頭の幹事会を裁縫部作業場に於いて開催。当時、青年団が稍々沈滞の色を見せつつあるのを憂ひて、之が対策として、毎月二十日の開園記念日を「青年デー」とし当日は団員全部出勤して、訓練、消防演習及奉仕作業等の団体行動となすことを決議した。

○一月二十日に第一回の青年デーを行つた。午前中日出グラウンドに於いて、団体訓練及消防予防演習を行ひ、午後六時より礼拝堂に於いて、新年親睦会を催し、大いに気炎を挙げた。尚、青年デーは二月、三月と毎月続けている。

○最後に特筆大書すべきは、一月三十一日に於ける山火事に際しての消防部の奮闘である。我等はこの事件によつて、青年団の機能が遺憾なく発揮された事と信ずるものである。之で過去二年間に亘る、青年団の主なる出来事は大体述べた積もりである。もとより、青年団の基礎はもう確立した。青年団はもう之で大丈夫だとは思っていない。青年団は未だ未だ赤ん坊である。搖籃時代である。今後団の統制上に於いて、或いは事業遂行上に於いて、幾多の困難を覚悟せねばならない。むしろ吾々は、益々多事ならんことを願ふべきである。私はここに青年団の前途を祝し、拙ない筆を擱くこととする。

一九三三・三・三一・一

栗 下 信 策

四二四 大島対愛生の野球試合

(愛生園神谷書庫蔵『青年愛生』第一号(愛生附録) 昭和8年)

大島対愛生野球試合〔抄〕

愛生対大島の一戦は遠征でのハンディキャップをものともせず、その打撃に、その走塁に、その守備に断然一日の長を見せて栄冠は長島騎士の頭上に。

愛生 8 | 7 大島

山陽新報対愛生第二回戦〔抄〕

待望久しかりし、山陽新報社チームとの第二回戦は桂葉に春風馨る四月十六日午後挙行される。而して若き矜持を長棍に賭して息づまるやうな白熱戦に終始し、四対三にて愛生惜敗す。

愛生 3 | 4 山陽新報

四二五 愛生グラウンドの工事

(愛生園神谷書庫蔵『青年愛生』第一号(愛生附録) 昭和8年)

愛生グラウンド工事に就いて

愛生グラウンド起工が発議されたのは、昨年三月の舎長会に於いてであつて、左の理由のもとに提案された。現在の日出グラウンドは、本園の拡張工事の予定地なれば、将来の愛生グラウンドの候補地を選定し、直ちに工事に着手せねばならぬ。それには、日出より新良田に至る中間の沼地を埋立て、理想的グラウンドを築造するにありと議決された。

工事の方法としては、愛生青年団の事業とし、団則第三條の精神に基き、奉仕的観念養成の目的を以て、園員全体の作業に俟つこととした。かくして、幹事会は左の如く実行細目を制定した。

先づ、之が連絡進捗の働きに当るため、総務一人、事務係一人、現場係一人、を置き、次に青年団員百二十名を六班に分ち、一班毎に班長を置き、第一班より第五班までを常務班とし、第六班を補助班として、一日四人宛各班を補助する事とした。(其后に団員の増加に伴ひ一班の増加を見た。)かくして、すべての準備なり先づ同所の除草に当り、之には特に婦女団の援助に俟つこととして、昭和七年四月六日より、草刈を開始し、工程約一ヶ年、所要延人員一、五一五人であつた。

除草を終り、愈々青年団によつて、工事の開始されたのは、

昨年五月四日である。爾来工程の進むにつれ、丈余の岩壁が出たり、或は湿地のため水が涌く処であつたり、意外の難工事に、工程遅々として捗らず、九ヶ月を経た。本年二月に至りて、全工程の三分の一に達したる過ぎない。然るに、一方では従来のグラウンドは新年度ヨリ増築のため、地均工事が始められるとの報道が入つた。さすれば、毎日の青年訓練、遙拝式、運動会等々の数々の行事の遂行は困難となる。因つて青年団幹事は工事促進のため、土工部の応援を求め、五月中旬までにこれを竣成せしめ少なくとも春季大運動会を新設グラウンドに行ふことを決議した。かくて青年の漲ぎる血汐は土工部の共同作業によつて、いやが上にあがり鋤や鶴嘴は朝陽に夕陽に映へつゝ一寸一寸と平地は築かれつゝある。

あゝ、内海に面したる四十間四方の新グラウンド、此か竣成の暁には外遊一年の後帰朝の吾らの林先生を歓迎ふるの地ともなり、又、大島、外島の親愛なる兄弟達の野球チームを迎へ戦ひを交へる場ともなるであらう。

最近までの工程は左の通りである（工程表略）

昭和七年五月四日起工

八年五月・六月中に完成の予定

四二六 秋季運動会

（愛生園蔵「舎長会議事録」昭和7年）

昭和七年九月三日 決裁

園長^印 庶務課長^印 医務課長^印 主任^印

舎長会開催二関スル件

来ル十月四日（火曜）午後一時ヨリ舎長会開催相成可然哉

討議事項

（一）入園者総代及副総代改選ノ件

（二）秋季運動会ニ関する打合

井上書記 秋季運動会挙行ニ当リ予テ青年団関係者ニ於テ協議シタル 別紙大綱ノ説明、一同異議ナク細目ハ青年団係員ニ委任シ各舎長選手募集ヲ取り扱フ事トナレリ

秋季運動会大綱

一、日時 昭和七年十月十七日（神嘗祭）午前九時入場式

二、競技種目（略）

三. 紅白ノ別 (略)

昭和十六年十一月五日

四二七 青年団主催秋季運動会の願書

(愛生園蔵「教育関係書類」昭和16年)

願書

来ル十一月三日青年団主催秋季運動会開催致シ度ク候間御許可被下度ク此之段及御願候也

長島愛生園長 光田健輔殿
園長(印) 庶務課長(印) 主任(印)

学芸部長 藤田政義(印)
入園者総代 伊原国策(印)

昭和十六年十月八日

^{〔朱書〕}
「恒例ニ依リ許可相成可然哉」

学芸部長 藤田政義(印)

入園者総代 伊原国策(印)

長島愛生園長 光田健輔殿

園長(印) 庶務課長(印) 主任(印)

会計(印)

四二八 秋季野球大会の願書

(愛生園蔵「教育関係書類」昭和16年)

願書

来ル十一月十八日青年部主催秋季野球大会開催致シ度ク候條御許可被下度ク此之段及御願候也